

研究

『文海宝韻』は非常に重要な西夏語の韻書で、刊本と写本があり、どちらもその他の大量の西夏文献とともに1909年に内蒙古自治区エチナ旗のハラホト遺跡で出土し、現在はロシア科学アカデミーのサンクト・ペテルスブルク東方学研究所に所蔵されている。

(一)『文海宝韻』の形体と名称

写本『文海宝韻』のロシアのサンクト・ペテルスブルク東方学研究所での整理番号は、И Н В. No.8364とИ Н В. No.4154で、紙面は横22.1cm, 縦25.8cm, 表紙も裏表紙もなく、版心には綴じ孔があるので、原書はおそらく胡蝶綴じで綴じられていたのであろう。紙面の上下は単欄、左右は双欄となっており、版心には文字はないようだ。各葉は左右両面、各面7行（但し12葉の右面のように8行面もある）、行間に隔線がある（図版一）。巻頭には序言の残片があり、本文は平声、上声・入声、そして雑類の3つの部分からなり、ほとんど全ての西夏文字が収められている。

平声部は合計27葉で53面、上声・入声部は合計18葉で35面、雑類部はみな残片で、大小合計42枚が残っている。平声部、上声・入声部の前には、平声韻と上声韻の各韻類の代表字が列挙され、平声は97韻、上声は86韻ある。平声と上声の中の各字は韻の順に配列され、さらにそれぞれの韻の中での同音字は、ひとかたまりに並んでいる。雑類はまず平声と上声の2部に分かれ、それぞれがさらに重唇音・輕唇音・舌頭音・舌上音・牙音・齒頭音・正齒音・喉音・來日舌齒音の9つのグループごとに配列されている。

残片の序言が終わり平声韻類の代表字が始まる前に、西夏文字で「文海宝韻平声第一」という一行があり、上声・入声の代表字が始まる前にも、西夏文字で「文海宝韻上声入声第二」という一行があり、上声・入声の代表字が終わり本文が始まる前にも、西夏文字で「大白高国文海宝韻上声入声第二」という一行がある（図版二）。これらからこの本の書名は『文海宝韻』とすべきで、正式には『大白高国文海宝韻』と称することがわかる。書名の上に国名を載せているのは、この本の格式を物語るもので、西夏王朝が勅令で公布した重要な著作であるという標識である。ちょうど、この書より1世紀ほど早く、中原の北宋において勅令で公布した同類の韻書『広韻』の正式名称が、『大宋重修広韻』というのと同じである。

写本『文海宝韻』は、刊本『文海宝韻』の略抄本である。その刊本『文海宝韻』もコズロフがハラホトで得た文献の一つである。原書は胡蝶綴じで、四方は単欄、平声部と雑類部の2つの部分が残るだけで、版心の上部にはそれぞれ「文海平」「文海雑類」の文字があり、版心の下部には頁数がある。上声・入声部が欠けており、表紙も裏表紙もなく、序言も跋文もない。はじめ専門家は、この本の版心にある「文海平」と「文海雑類」という文字から『文海』と『文海雑類』の2冊の本とした⁽⁷⁾。ただし、ネフスキーだけは1冊の本と見なそうとした⁽⁸⁾。ソ連の西夏学者が60年代に『西夏における写本刊本目録』を出版したときも、やはり2冊の本として扱った⁽⁹⁾。1969年にソ連の学者がオリジナル文献とそ

の研究を出版したが、その名称も『文海』とした⁽¹⁰⁾。日本の西田龍雄教授は『文海』平声部と雑類部の体裁が異なることを根拠に、やはり2冊の本とした⁽¹¹⁾。一体この本は1冊の本なのか2冊の本なのかを決めるには、西夏語の音韻体系全体をどう考えるかとかかわっており、私は1980年にこの2冊の関係を「『文海雑類』が収める字は『文海』には収められていない。なぜなら『文海雑類』が『文海』の補充部分だからだ。そこでこの二つは同じ一つの字典で、『文海』と言えは『文海雑類』も含まれる、という可能性は充分あり得る」と明言した⁽¹²⁾。1983年私たちが『文海研究』を出版したときも一冊の本と見なし、同時に、部分『文海雑類』は全体『文海』の有機的な組成物であることを示した⁽¹³⁾。これでもまだ学界が依然として異なる見方をしているので、1988年私は『西夏文文献新探』の中で「『文海』と『文海雑類』は同じ本である」と題して、次のような6つの理由を挙げて『文海』と『文海雑類』が同じ本であることを論証した。すなわち

1. 2つの部分が収める字に重複がない。
2. 形体が同じである。
3. 版心の「平」「雑類」はどちらも各部の特徴を表す文字である。
4. 西夏文韻書残片にある「雑類終」という記述は、全体の一部の終わりに過ぎず、「雑類」が単独の1冊の本である証拠にならない。
5. 平声の韻目は、平声部分が単独の1冊であることを証明することはできず、上声部分の前にも上声の韻目があったことが推測できる。
6. 平声と雑類が収める文字の配列順序の違いこそ、西夏語の特徴と『文海宝韻』の編集水準を反映するものである⁽¹⁴⁾。

現在までに、写本『文海宝韻』を見渡し初歩的な研究を終えて、平声、上声・入声、雑類が1冊の本の異なる部分であることが明確になったばかりでなく、本書の名称は『文海宝韻』であり、刊本の『文海』もその正式名称は『文海宝韻』とすべきであることがわかった。当時の西夏文字による刊本は、中原の漢文による書籍と同じで、書籍の版心に書かれる書名は略称であることが多く、例えば有名な西夏文法典の『天盛改旧新定律令』の版心には「律令第一」「律令第二」などと印されているだけである。同様に「文海平*」と「文海雑類」は「文海宝韻平声」「文海宝韻雑類」の略称なのである。刊本『文海宝韻』は上声と入声を欠いているが、刊本の上声と入声部分の版心には、「文海宝韻上声入声」の略称である「文海上」或いは「文海上入」とあったことが推測できる。

また本書の上声・入声が終わったあとに、上部は欠けているが「……月十五日日宝韻上声入声竟」という行草書による小字の一行がある。ここから推察するに、この本は『宝韻』とも略称されていたようだし、また刊本『文海宝韻』の版心には「文海平」「文海雑類」とあるので、『文海』とも略称されていたのだ。

この他、もう一つの西夏語の韻書である『五音切韻』の序言では『文海宝韻』と言及し、『文海』の2文字では用いていないので、これが『文海宝韻』こそ本書の正式名称であることの証である⁽¹⁵⁾。

残片の序言には『文海宝韻』という書名は現れないが、失われた部分にはこの書名があったのかもしれないが、今の我々にはそれを知る術がない。ただ序言に「切韻」という言葉は見受けられ、先に「はじめて『切韻』を作る」、その後「朕、今『切韻』……終わる」とある。『文海宝韻』は一つ一つの字に反切で注音しているので、『切韻』の書と呼ぶこ

ともできるので、あるいは本書は『切韻』と称されていたのかもしれない。

(二)『文海宝韻』の序

刊本『文海宝韻』は巻首が欠け、序言もない。刊本の版心には頁数があり、現存の一番初めのページは4ページの左面(後半部)である。右面(前半部)には欠落している平声第1韻から第35韻の韻類代表字があるはずで、その前の欠落した3ページには、書名と序言があるはずであるが、残念ながら見る術がない。これに対して、写本は内容がかなり保存されており、平声、上声・入声、雑類の各部分があるだけでなく、序言も残っている。本の序言というものは、その本に関する多くの重要な情報を伝えていることが多いので、この写本『文海宝韻』の序言を我々が重視するのも当然である。

しかし残念なことに、この本の序言は多数の残片となり、欠けた字が多く、完全な復元は難しい。筆者は非力ではあるが、こうした破損が甚だしい序言をつなぎ合わせ、解釈し初歩的な研究を試みるものである。序言が不完全なため、問題のいくつかは推測と問題提起にすぎない段階であるが、同行の惜しめないご指教を切にお願いする次第である。

序言の残片は全部で9枚あり、И Н В. №8364とИ Н В. №4154の2つの整理番号が付き、それぞれ『俄藏黑水城文獻』第七冊の177,178,231,232ページに収められている。こうした残片は、つなげられるものもあれば、その内容と関連する文献に基づき、それらの位置を確定できるものもある。232ページの№111(下)と177ページの№1は一つにつなげられ、231ページの№110と232ページの№111(上)と177ページの№2は一つにつなげられ、178ページの№3と232ページの№112(上、下)は一つにつなげられ、178ページの№4はそれだけで一つになっている。こうしてつなぎ合わせてみると、この4つの紙片はどれも上下には単欄があり、左右には双欄があり、どれも7行で、行間には隔線があり、字体も同じである。こうした紙面の形式と大きさは『文海宝韻』の本文と同じで、さらに序言の最後のページの末尾は、ちょうど『文海宝韻』本文の1ページ1行目の5字とつながり、こうしてできた最後の一句は、紛れもなくこの序言が『文海宝韻』の序であって、その他の文献の序ではないことを証明している⁽¹⁶⁾。西田龍雄教授は、かつてサンクト・ペテルスブルクで写本『文海宝韻』の序言の残片5枚を目にされたが、これを『雑類』の序言と見なした⁽¹⁷⁾。

この序言の前後は欠けている。第1面の右第1行目は序言の冒頭ではなく、この前に少なくとも半ページはあったことがわかる。第2面と第3面は一ページの両面であり、第4面は一ページの右側で、その最後の行の末尾はちょうど左側の第1面の一行目につながる(図版三)。ここで序言が終わり、本文が始まる。

序言の訳文は以下の通りである(○の中の数字は行数を、……は欠文を、[]の中の内容の多くは『五音切韻』の序言に基づき、試みに補ったものである)。

第1面(232ページの№111(下) + 177ページの№1)

- ①……を選び集め、……らを博士とした。その人はまた昇進して夫-
- ②子となり、内宮門を出入りするのに四頭だての馬車に乗り、威儀は周囲を圧倒し、
- ③家臣幕僚と同じ先導を受け、楽団が音楽を演奏する中、国師院の宴の席に赴いた。
- ④三年の期間内にすでに完成し、寅年十月十一[日に風-]

⑤角城皇帝は、官蔓礼を終え……を廻ると、威儀は益々高まり……

⑥……武盛、法？、出礼、主仁皇帝が即位すると、文は……

⑦……法律、僧侶、儒者、[陰] 陽、算法、楽人、芸能……

第2面（231ページのNo.110 + 232ページのNo.111(上) + 177ページのNo.2）

①……[礼など] 諸々のことがらが皆終わると、この……が至り、……が

②丑歳五年八月五日に至ると、……が

③行われた。今、[各] 種の文字を見るに、西天、姜、漢……

④番の文字を忘れさせないためであり、五音とは……で[天-]

⑤賜礼盛国慶元年七月[十五日] ……

⑥……羅瑞智忠らに『切韻』の編纂を始めさせ、

⑦……ら16名を選ぶと、そのまま内宮のなかで……

第3面（178ページNo.3 + 232ページのNo.112(上, 下)）

①……はすでに大部のものになり、五音の字母は明らかになり、清

②[と濁、平と仄は分かれ]、軽と重は異なり、上下の品は明らかになり、切字は

③[呼応し、韻母は摂と] 接し、文字の本となり、細大漏らさず集めれば、

④永遠に[忘れられず] 伝えられ……と言い、新しい字は

⑤増補した。朕は、今『切韻』が[時間通り] 本となったので、全国の喜びとし

⑥知識の栄える[礎として、仏法經典の] 成果として、王礼法令が

⑦……を解き用い、儒詩の[清濁、陰] 陽、吉凶、季-

第4面（178ページのNo.4）

①[記、道教、医師、] 詩歌集など、文字を使う源である。譬えれば

②[大海は深く広大で、諸々の泉は水を蓄え] 枯れず、いつも水をたたえ、日と

③[月が遍く照らせば、愚も] 智も皆よく分かる。諸山は皆高く、諸業はこの上なく

④すべての宝の中で字宝が他に勝る。『切頭』を編み……

⑤……は深く、大言は輝きを失う。それは朝日に灯火が劣り、限られた

⑥……ように測り知れないからである。天下の各種の文字を解釈するのは難しく

⑦……計れない。正しいか否かは賢者の審査検討より、その是

第5面（『文海宝韻』本文の1ページ1行目の5字）

①非は後の世の智者に判断を委ねるのが宜しかろう。

『文海宝韻』の序言は残片で不完全で、その内容を全体的に完全に知ることは難しいが、ここからは翻訳と解釈と初歩的な分析を通して、『文海宝韻』と西夏の文化に関する新たな重要資料を得ることができる。

1. 西夏文字の創作と制定に関して

西夏文字の創作と制定は、西夏文化史上の一大事で、学界はまず、それを宋や元の漢字文献で知った。しかし、漢籍史料の記載は混乱し、食い違いもあった。西夏の初代皇帝である元昊(げんこう)の時に創作制定されたという史料もあれば、元昊の父、徳明の時に創作制定されたという史料もあり、後世の学者の意見は一致しなかった。筆者は西夏文字資料を拠り所に、漢字文献と関連させた総合的な研究を行い、多方面からの論証を繰り返す

て、元昊の初年に西夏文字を創作制定したことを確認した⁽¹⁸⁾。現在、この説は学界で広く認められているが、その文字の創作と制定の詳細は、依然として不明なところが多い。

上述の序言の1ページめが、西夏文字の創作と制定について言及した部分であるが、文字を創作制定した主要人物の名前は、前の部分が欠けて、残っていない。しかし我々は、その他の資料から、最初に発案したのは西夏の初代皇帝である景宗元昊で、具体的に文字を創作したのは、西夏を開国した元勳でもある、制字師の野利仁榮であると知ることができる。序言では「……らを博士とした。その人はまた昇進して夫子となり、内宮門を出入りするのに4頭だての馬車に乗り、威儀は周囲を圧倒し、家臣幕僚と同じ先導を受け、楽団が音楽を演奏する中、国師院の宴の席に赴いた」とあり、これは、野利仁榮らが当時非常に重用されとても高い身分が与えられ、多くの栄誉が与えられた情景を描いたものである。「3年の期間内にすでに完成し」とは西夏文字の創作と制定が「3年にしてはじめて成る」⁽¹⁹⁾ことを言っており、続く「……寅年十月十一日に（風）角城皇帝は、官蔓礼を終え……」とある中で「風帝」あるいは「風角城皇帝」とは、西夏文『大白高国新訳三蔵聖経序』や『妙法蓮華経』の序言、『過去莊嚴劫千佛名経』の発願文に見られる名前⁽²⁰⁾、どちらも初代皇帝である元昊の尊号を指す。その尊号の前の「……寅年十月十一日」とは、元昊が正式に帝位に就き、冊を受けた日時、つまり天授礼法延祚戊寅年元年（1038年）十月十一日のことで、これも漢字史料と符合する⁽²¹⁾。また「官蔓礼」とは『文海宝韻』に「曼也、官家官曼也」⁽²²⁾とあり、「官家」とはここでは特に皇帝を指している。「官蔓礼」とは皇帝が帝位に就く時、冠を戴（いただ）く儀式のことで「加冕」と同義かもしれない。これは上述の人物と時間と、出来事がすべて合致する。元昊が帝位を称したのちに、文字の製作者にさらに高い栄誉を与えたのである。続く「……武盛、法？、出礼、主仁皇帝」とは西夏のもう一人の皇帝の尊号であり、文章の流れから、ここは当然第2代皇帝諒祚（りょうそ）の称号のはずである。この尊号は完全ではないが、ここに書かれている意義は大きい。なぜなら、西夏の事跡が比較的多い5代目までの皇帝のうち、4人の皇帝には西夏文字による尊号が知られているが、2代目だけが欠けていたのが、これで知ることができたからである。諒祚が王位を継承すると、西夏文字は広範に使われ、法律・仏教・儒学・陰陽・算法・音楽・芸能などの各方面で応用されたのである。ここから、西夏王朝は文字や言語を重視し、中原地区に決して劣るものではなかったことが分かる。この序言は西夏の文字の創作と制定に関する細部が分かるだけでなく、西夏人が編纂した第一次資料により、西夏の元昊が帝位に就いたという西夏の一大史実の月日を記しているのである。

2. 『文海宝韻』の編纂時間に関して

序言の2ページめには「……丑歳五年八月五日」と「賜礼盛国慶元年七月」という年の記載がある。後者の年号はかなり整っていて、「賜」の前に「天」の字が欠けているが、「天賜礼盛国慶」とは西夏第3代皇帝の惠宗秉常（へいじょう）の年号であり、元年とは西暦1069年に当たる。この年号の後に「……羅瑞智忠らに『切韻』の編纂を始めさせ」とあるので、この年を『文海宝韻』編集の開始年と考えることができる。前者の「……丑歳五年八月五日」は西夏第2代皇帝の毅宗禪都（しゃと）の辛丑5年（1061年）になる。この年号の後には、西天文（サンスクリット語）、姜文（吐蕃語、即ちチベット語）、漢文

の影響が述べられ、本書の編纂が準備された時期と考えられる。『文海宝韻』の成書は、初歩的な分析だが、天賜礼盛国慶年間、即ち11世紀中期、西夏前期と定めることができる。この序は御制序で、序の最後に年号はない。しかし、3枚目と4枚目には惠宗以降の年号が見当たらないので、この序を惠宗の御制序と推測できる。惠宗は8歳で即位し、母である后梁氏が摂政となると、その舅である梁乙埋と権力を握った。当時毅宗が奨励してきた漢の礼法を尊ぶ政策に反対し、「蕃の礼に復す」ことを行い、タングート文化を推進させた。系統的に「蕃文」と「蕃語」を記録・解釈した『文海宝韻』こそ、蕃の文化が大いに推奨された背景で編纂完成したものである。

『文海宝韻』の刊本は宋代の公文書の裏に印刷され、その中の一枚の裏面には「建炎二年」という文字があり、ここから現存する刊本の成書は建炎二年（1128年）以降であり、西夏の中期にあたることが知れる。この写本は刊本の略抄本で、書き写した時期は刊本の出版以降であることは言うまでもない。

3. 『文海宝韻』の作者について

序言の2頁目に「……羅瑞智忠らに『切韻』の編纂を始めさせ」とあるので、羅瑞智忠が本書を編纂した中心人物であろう。『音同』乙種本の重校序から『音同』を編纂した中心人物の中にも「羅瑞」という姓を持つ人物がいることが知られている。その序文の冒頭には「この『音同』とは、かつて、切音の博士である令六犬長や羅瑞靈長などが編纂した」とある。この羅瑞靈長と羅瑞智忠は同じ姓であるので、二人は一族であろう。羅瑞智忠は僧侶であったかもしれない。「智」という字は僧侶がよく用いた名であるからだ。西夏の僧侶が世俗の著作の編纂に携わるのは、当時よく行われていた。序言の中の「羅瑞智忠」の前は欠けているので、他にどのような人名があったのか、知る手だてはない。

序言は続いて「……ら十六人を選んで」とあり、羅瑞智忠をリーダーとする専門家集団が本書を共同編纂し、本書はその集体編纂の成果なのかもしれない。このように我々は基本的に『文海宝韻』の編纂者を推測することができるが、こうしたことは、これまでは全く知られていなかったことである。

学者たちは選ばれて「内宮」、即ち宮中に招かれ宴会に赴く、あるいは宮中で辞書を編纂したのかもしれないが、字が欠けているので分からない。しかし学者たちが皇室から手厚い持てなしを受けたことは、間違いない。

写本『文海宝韻』の末尾、つまり第三部分の「雑類」終わりに、3行の題記があり、おそらく『文海宝韻』の作者と関係があるのだろうが、惜しいことに完全ではないが、そこには次のようにある⁽²³⁾。

提挙中書授業全……

提挙中書提点……

業……授意……

最初の人物には「提挙」の称号がある。「提挙」とは西夏の官職の中の具体的な仕事の総責任者の職名で、ここでは『文海宝韻』の編纂を指揮した首席学者なのかもしれない。その人は「中書」の肩書を持つ。中書と枢密とは西夏の官職の中でも上位に属し、位も高い。「業全」は西夏の爵位の一つで、やはりとても高いクラスにある。二番目の人物も「提

挙」と「中書」の称号を持つが、爵位はなく、たとえあっても最初の人物より位は低い。

「提点」と訳した西夏語の原文は「言の過ぎる処」の意で、ロシア所蔵の西夏文献にあるものと同一の仏教發願文で、西夏文字と漢字本を対照すると、「提点」に当たることがわかる。この二番目の人物もこの仕事の総監督であるが、最初の人物の助手である。3行目はわずか3字しかないので文意は明らかではない。こうした題款の職名は完全ではなく、人名も欠けているが、前の二人の人物の官職の高さを考えると、彼らは、書き写した人物ではなく、この重要な著作の主編である羅瑞智忠などを指すと推測できる。

書き写した人物は、名前を留めていないが、抄録する過程で字形に対する注釈や字義に対する解釈に部分的な修正があり、この人物も西夏文字に精通した学者であろうと推測できる。ひょっとしたらその人物は、序言の中の「後の世の智者」に自分をなぞらえ、先人の著述の校正をしようとしたのかもしれない。写本と刊本を比較すると、写本に多くの不正確さや誤りがあり、遺漏字や誤字や衍字も多いことがわかる。あわただしく書き写し、校勘もしっかり行わなかったようだ。特に、書き写すとき、字形と字義の注釈の一部を省略し、反切部分もすべて省略してしまっているの、刊本の重要な資料の多くが失われたことになり、大変残念である。しかし一部であっても貴重な文献を残してくれたので、我々はこうして『文海宝韻』の全体の骨組みを知り、刊本の残欠部分を補うことができるのだ。

4. 『文海宝韻』の内容と評価

序言の3ページめには「五音の字母は明らかになり、清と濁、平と仄は分かれ、軽と重は異なり、上下の品は明らかになり、切字は呼応し、韻母は撰と接し、文字の本となり」とある。この一段は『文海宝韻』自身の編纂内容に対して述べたもので、その中には「五音字母、清濁、平仄、軽重、上下、切字、韻母」など、多くの学術用語が見られ、当時の中原地区で行われていた音韻学と通ずるところがある。こうした術語の内容は『文海宝韻』などの西夏語の音韻書籍と結びつければ、理解しやすいが、「清濁、平仄、軽重」などの術語の意味するところが、中原の音韻学と全く同一なのかどうかは、さらに研究しなければならない。特に西夏語の音韻を再構するときには、こうした術語から啓発が得られることもあるし、すでに当時一部の西夏人研究者が重視していたのに、我々はそれに十分に注意を払っていないかもしれない問題についても、研究が深化してくれば、あるいは新たな進展を望めるかもしれない。当時の卓越した音韻学理論・方法論の指導の下でなされた成果を、確かに『文海宝韻』は反映している。現在から見ても、その科学性と体系性は依然として驚嘆するものがある。その時の序言がその編纂の水準を高く評価して、「文字」の本としているのも故なしとしない。

皇帝の名で序言が書かれていることは、本書が当時重要な役割を果たしていたことを意味する。その御制序の中では『文海宝韻』の効能が強調され、「全国の喜び」であり「知識の栄える礎」であり、そして、それを用いて佛法や經典、王札や律令を解釈し、儒教や陰陽、曆法や吉凶、曆法や歌本集などの文化的活動をするための根源であるとした。事実、この御制序では、西夏文字と文献の効能までも述べられているのだが、『文海宝韻』は、あらゆる西夏文字を含み、字形と字義と字音の解釈がある点からして、その序言で、それ

自体の西夏社会や文化に果たす効能を強調するのは、極めて自然なことである。序言ではさらに、「比興（譬えたり、なぞらえたりする）」という手法で大海と高山に譬える。各種の行事の中でも「字宝」を最上としているが、これも中原の儒教と通ずるところがあり、西夏の支配階級が、民族の言語と文字を以て代表される西夏文化を極めて重視したことは、容易に納得がいく。

5. 『五音切音』序との関係

『五音切音』はハラホトから出土したもう一種の韻書であり、西田龍雄教授の論考がある。この本の原文には6種類の版本があり、はじめてみな『俄藏黑水城文獻』第七冊に収められている⁽²⁴⁾。その中の甲種本（No.620）には完全な序言があり（図版四）、その内容は上述の『文海宝韻』序言と重複する箇所が極めて多い。『文海宝韻』の序言をさらによく理解するために、『五音切韻』の序の全文を以下に掲げる⁽²⁵⁾。

『五音切音』序

今、各種の文字を視るに、西天、姜、漢にすでに切韻あり。今、文字の五音とは、平上去入の各自の字母すでに明らかに、清濁、平仄分かれ、重軽分かれ、上下の品明らかなり。

朕の功德力を以て、今、切韻は時間どおりに編纂が終わる。全国の要衝にて、真の智慧を増大する本である、佛法や經典、王礼や律令、儒教と清濁、陰陽と吉凶、曆法と道教、医術と算法、歌曲本集などの集大成で、文字の拠り所である。

譬えれば、大海が広大深遠で、諸水を蓄え枯れることも溢れることもなきがごとく、すべてを収めている。日月が遍く照すがごとく、智者も愚者もみな分かる。諸山のなかで須弥山が最高なように、諸業のなかでは文宝が最上である。そこで『五音切韻』を建つるに、『文海宝韻』の字を撰すれば、名義が雑然とすることはなく、混用することもない。本書の義を理解されたい。

『五音切韻』序にも「朕」の字があり、御制序とすべきである。その内容からわかるように、上述の『文海宝韻』序言の2ページめ、特に3、4ページめの文章や語句の類似点が多い。そしてその最後に「そこで『五音切韻』を建つるに、『文海宝韻』の字を撰すれば」とあることから、『文海宝韻』の成書が先で、『五音切韻』はその後に編纂されたことが証明される。すると『五音切韻』の序は大部分『文海宝韻』の序言を抄録したものである。では『五音切韻』序は誰が書いた（抄録した）のか。解答は一つしかないようだ。つまり、惠宗が自分の序言を抄録したものと考えられ、『五音切韻』も惠宗時期に作られたと思われる。『五音切韻』の編纂は『文海宝韻』と同じく「蕃の礼に復する」という文化背景下の産物である。両書とも西夏の民族文化が高度に発展した産物で、現在の我々が西夏の文化を研究する上での貴重な資料でもある。

『文海宝韻』と『五音切韻』はどちらも西夏語の音韻に関する書籍で、『五音切韻』は『文海宝韻』の字を撰する、つまり『文海宝韻』の中の字を、等韻の方法で韻図と韻表に納めたものである。両書は同じ皇帝の時代に作られ、序言には重複がすこぶる多く、内容は関連しているので、両者を比較すれば、認識と理解はいつそう容易である。

『文海宝韻』の序言は豊富な内容を持ち、『文海宝韻』そのものと西夏文化の発展を知

るのに、重要な価値を持ち、欠けた部分はなんとも惜しまれるが、残された紙片からこれまで知られていなかった知識を得ることができる。

(三) 写本『文海宝韻』と刊本の関係

写本『文海宝韻』の内容を紹介する前に、それより先に公刊された刊本『文海宝韻』の内容を簡単に紹介する必要がある。『文海宝韻』は漢字本『切韻』に類似した韻書であるが、文字構造を解釈した内容も含んでおり、この点は漢字本『説文解字』に似ている。そこで同書は、『切韻』と『説文解字』に共通する特徴を持っていることになる。

前述のように、『文海宝韻』は平声、上声と入声、雑類の3部分からなる。刊本の平声と雑類の2つの部分は、各面7行、本字は被注釈字で、字体は大きく一行を埋めている。注釈字は小字で、一行に2列。平声部のそれぞれの韻の最初には代表字(韻目)が書かれ、その下には数字で韻類を標示してある。各韻が収める西夏文字は、基本的には声母の順に配列されている。字音が同じものを一組とし、各組の間は小さな丸で区切られている。独字は反切字が縦に一行書かれているので、それが目印となっている。どの字の解釈も3つ部分から構成されている。第1部は字形の構造分析で、ほとんど4字で表される。例えば「×左×右」(×は西夏文字を表す)とは、ある字の左部と別の字の右部からこの字が構成されることを表し、字形の構造を分析する術語には、左、右のほか、頭・下・全・圏・中・脚などがあり、それぞれ字を構成するのにどの部位を取るのかを表す。第2部は字義の注釈で、そのほとんどは、同義または類義の注釈や解釈が用いられている。第3部は反切による注音で、同音の組には最初の字に注音があるだけで、その多くは4字で表される。形式は「××切×」で、最初の2文字は反切上下字を示し、4字目はその組に属す同音字の個数を示す。独字には反切上下字しかない(図版五)。例えば平声第1韻第1字は、次のようになる。

姓	〔布〕左	〔布〕者族姓名是又	北路
	〔丙〕右	尊長之頌語亦是	切四
	第1部	第2部	第3部

第1部 「布」の意の文字の左部と「丙」の意の文字の右部から成る。

第2部 掲げられた文字は族の姓名であり、尊敬を意味する頌語でもある。

第3部 発音は「北」「路」の反。同音字は4字ある。

刊本『文海宝韻』の平声部に残欠はあるが、2577の大字を収めている。雑類部は残欠がかなり多いが、486の大字を収めている。

ここから、西夏語を反映した韻書『文海宝韻』は優れた編纂水準を備えており、西夏の学者による、自己の民族の言語に対する認識と研究の高さを反映していると同時に、言語研究が最も進んだ漢語地区をも含めた、ある一時代の言語認識や研究水準を反映している。『文海宝韻』には高い学術的価値があり、西夏語を研究し再構するのに最も基本的で、最も重要な資料の一つである。

一方、写本『文海宝韻』は刊本『文海宝韻』を書き写したものである。その根拠には、

以下の点が挙げられる。

——刊本の平声部分と写本の該当部分を比較すると、各韻の配列順序が同じであるだけでなく、韻の中の文字配列順序も基本的に同じである（個別的な不一致は後述する）。雑類についても同様である。

——写本12ページには30字の漏れがある。平声第20韻の終わりの10字、第21韻の17字全部、第22韻の初めの3字がそれである。この30字はちょうど刊本『文海宝韻』の29ページめのそっくり一枚分に当たり、一字の狂いもない。これは、抄録の底本とした原刊本の方の、この頁が欠けていたために生じた遺漏であろう。この残念な遺漏は、写本と刊本の間係をはからずとも証明するものとなった⁽²⁶⁾。

刊本は平声部分を基本的には残しているが、完全でなく、残欠部がわずながらある。例えば、26ページの左面では大字が3字欠け、45ページの左面と46ページの全面がないので、計62字が欠けているが、これらはみな写本で補充できる。刊本26ページの左面で欠けている3字は写本の①11.1204、①11.1206、①11.1208で補え、しかも①11.1204と①11.1206には、大字のほかに字形構造の注釈まで残っている。45ページの左面と46ページの全面は、写本の①15.2406から①16.1503までで補える。そのうち大字以外に、字形構造の注釈があるものが11字、字義の解釈があるものが3字ある。

この写本の抄録者は、書き写すとき、そのまま一字も漏らさず写したというのではなく、基本的には順序通りのすべての大字を写しておきながら、字形や字義の解釈字に関しては、選び出したり、省いたり、時には自分の分析を以て書き換えたりしている。なぜそうしたのか、その理由は定かではないが、この抄録者は反切の注釈には興味がないらしく、まったく写していない。そのため刊本で欠けている上声と入声字には、依然として反切の上下字が得られないままである。

写本『文海宝韻』の大字（被注釈字）は行書体で、一定の習練を積んだ、比較的きれいな筆跡である。しかし、筆画は不規則なところがあり、例えば横拐（一）を、しばしばそれとよく似た2つの点（ソ）のように書いているので、慣れないと識別が難しく、たくさん見ることで対応規則を見い出すしかない。一方、小字（注釈字）は字形が小さいだけでなく、字体も行草書あるいは草書なので、読解や翻訳が難しい。以下、被注釈字と注釈字に分けて説明する。

1. 被注釈字

写本『文海宝韻』の被注釈字は、韻の配列や字の並べ方は刊本の『音同』と基本的に同じであるが、詳細に比較すると相違が見られる。刊本に比べ、写本には欠字があり、それは書き手の不注意で漏れたものであろう。平声韻では、第10、15、25、30、32、34、36、46、52、54、56、61、62、66、67、73、76、80、81、83、85、86、87、88の各韻では1字漏れ、第29、59、64、92の各韻では2字漏れ、第69韻では5字漏れているし、特にそっくり1頁が漏れた箇所では、第20韻の10字、第21韻の17字すべて、第22韻の3字の、合計30字が漏れている。以上、平声韻では66字が遺漏となっている。

さらに興味深いのは、写本が刊本より、字が多い場合があることである。一般に抄録の遺漏はよくあることだが、字数が増えることはめったにない。写本『文海宝韻』の場合、

こうしたことは、多くないが数例見られ、平声部は刊本より12字増えている。

第5韻は1字多く(①06.1705)、他の文献には収録されていない新字である。すぐ上の字と形が似ていて、旁(つくり)が一つ多い。「礼儀」の意であるすぐ上の字と同音で(漢字の注音は〔母〕)、上の字だけで通用するので、刊本では収録されなかったのであろう。

第11韻は2字多い。1字目(①08.2202)は、上声第74韻の代表字だが、その韻の中にこの字がないのは、明らかに誤りである。また、この字は『音同』では、別な2字と同音字の組を成して(『音同』乙種本[43.256 喉音])、この字自体は、『文海宝韻』ではすぐ上にある1字とともに1単語を構成して、この2字の韻は全く異なっている。これは書き手の誤りである。2字目(①08.2508)は、刊本の第11韻にはなく、雑類(平声齒頭音)にあり、他の4字と同じ同音字の組を成している(漢字の反切は〔尼足 西〕)。すぐ上の字の意味に引かれ、誤ったのかもしれない。

第14韻は2字多い。1字目(①09.1306)は、刊本では平声第3韻(漢字の注音は〔嚼〕)にあり、写本でも平声第3韻にすでに収録されているので(①06.1302)、ここは重複である。すぐ上の字は「施す」の意、この字は「供する」の意。2字目(①09.1307)は、刊本では平声第7韻(漢字の注音は〔余〕)にあり、写本でも平声第7韻にすでに収録されているので(①06.2702)、ここは重複である。この字は「饋る」の意、すぐ上の字と字形が近い。

第17韻は1字多く(①10.1603)、上声第14韻(漢字の注音は〔昊〕)で、しかも韻類代表字である。この字は音訳字であり、写本では上声第14韻にもすでに収録されているので(②06.1602)、ここは重複である。すぐ上の字も音訳字(漢字による注音は〔合〕)である。

第36韻は1字多く(①16.1401)、刊本には欠けている。しかしこの字は上声第33韻で、写本では上声第33韻にもすでに収録されているので(②06.1602)、ここは重複である。すぐ上の字と字形が近い。

第48韻は1字多く(①18.2208)、刊本では平声第10韻(漢字の注音は〔墜〕)にあり、写本でも平声第10韻にもすでに収録されているので(①07.2702)、ここは重複である。この字は「刺す」の意で、すぐ上の字と同義連語「刺しとおす」を構成する。

第62韻は1字多く(①22.1503)、刊本では平声第75韻(漢字の注音は〔宜則〕)にあり、写本も平声第75韻にもすでに収録されているので(①25.2507)、ここは重複である。この字は、すぐ上の字と同義連語「(餅を)焼く、あぶる」を構成する。

第66韻は1字多く(①23.1504)、刊本では雑類平声(喉音)にあり、写本でも雑類平声喉音にすでに収録されている(③04.1204)。この字はすぐ上の字と左右互換字なので、字形が似ており、意味も近く「煮込む」の意で、ここは重複である。さらにすぐ上の字も雑類にあり、ともに重複している。

第71韻は1字多く(①25.1206)、刊本にはない。『音同』乙種本にこの字とすぐ上の字が同音で(『音同』乙種本45.146)、意味が近く、漢字の注音は〔訛〕、意味は「院、園」である。刊本には収録がなく、ここでは2字いっしょに書かれている。

第82韻は1字多く(①27.1502)、上声第58韻(漢字の注音は〔墨〕)にあり、この写本では上声第58韻にすでに収録されているので(②14.1607)、ここは重複である。すぐ上の字と字形が近く、意味も近く、2字で同義連語「教え唆す」を構成する。

以上から分かるように、写本では大字の重複が多く見受けられる。まとめると、平声の重複としては、第14韻の1字が平声第3韻と、もう1字が平声第7韻と重なり、第48韻の1字が平声第10韻と重なり、第62韻の1字が平声第75韻と重なる。上声の重複としては、第17韻の1字が上声第14韻と重なり、第36韻の1字が上声第36韻と重なり、第82韻の1字が上声第58韻と重なる。他には、第11韻の1字は重複ではないが上声第74韻に入れるべきである。雑類の重複としては、第11韻のもう1字が雑類平声（齒頭音）と重なり、第66韻の1字が雑類平声（喉音）と重なる。こうした重複字は往々にして、すぐ上の字と意味が近く、2字で連語を作れる場合が多いので、すぐ上の字に影響されて、写し誤ったのであろう。この他、新しく字を増えた2箇所、すなわち第5韻の1字と第71韻の1字は、比較的特殊な例である。すぐ上の1字と同音で、しかも意味も字形も近いため、刊本では収録されなかったが、抄録者は補充すべきであると判断して補填したか、あるいは意味が近いために重複して収録してしまったのかもしれない。

この他、写本によって、刊本で欠けている第35韻の16字と第36韻の46字を増やすことができた。

写本の上声韻の中でも、ひょっとして大字の遺漏や増補があったのであろうか。もし刊本からの写し具合によって、抄録態度がいい加減で校勘が不充分であったり、抄録者の勝手に新字を増やした現象が見て取れれば、写本の上声韻と刊本のそれにも字数の増減があるのかもしれない。しかし対照する刊本がないため、全面的な校勘はできないが、写本の中に見られる韻類の不一致から、大字が増加している例を見つけることができる。例えば

上声第19韻の1字（②07.1510）は、平声第22韻に属し、刊本でも第22韻にあるが、この写本でも第22韻にあるので（①11.2401）、ここは重複である。

上声第34韻の1字（②10.1506）は、上声第7韻に属し、この写本でも第7韻にすでにあるので（②04.1102）、ここは重複である。この字はすぐ上の字と音が近い。

上声第43韻の1字（②12.1209）は、平声第22韻に属し、刊本でも第22韻にあるので、重複と考えられるが、この写本は平声第22韻の初めの3字が欠けているので、この字がそこに位置すべきもののなのであろう。

上声第54韻の1字（②13.2605）は、平声第61韻に属し、刊本でも第61韻にあるが、この写本もすでにあるので（①22.1207）、ここは重複である。

上声第76韻の1字（②16.2603）は、上声第36韻に属し、この写本でも第36韻にすでにある（②10.2206）、しかも韻類代表字でもあるので、ここは重複である。

上声韻にも特殊な例として、遺漏が見られる。例えば、上声第74韻にはこの韻類の代表字が漏れているのが、その一例である。

2. 注釈字

写本『文海宝韻』は刊本『文海宝韻』の略抄本である。抄本には注釈のない大字が多数あり、注釈を抄録するか省略するかについて、必ずしも厳格な原則があるわけではなく、抄録者がかなり随意に決めているようである。抄録者の判断で、字形や字義の理解が難しくないと思うような字は、注釈をとらず、理解が難しいかあるいは強調を必要とするような字は、抄録または節録の形で注釈を施したのかもしれない。この他にもこの抄録者は、刊本

の注釈が不適切、あるいは補充が必要と思うと、どんどん新しい注釈に改めている。字形構造についての注釈があるもの、字義についての注釈があるもの、少数ではあるが、字形と字義についての注釈が揃っているものもある。

例えば、平声第1韻の60字のうち、注釈があるものは16字、その中で字形についての注釈があるのは5字、字義についての注釈があるのは9字、字形と字義についての注釈が揃っているものはわずかに1字である。反切についての注釈は全く見られない。

字形についての注釈についても、字義についての注釈についても、刊本からは、該当する箇所が例外なく搜し出せる。写本の方が、刊本の注釈より簡単で、要点のみである。

(1) 字形の注釈

写本『文海宝韻』の決して多くない注釈の中で、大字の字形構造についての注釈が占める割合が、高くなっている。注釈の形式は刊本と同じで、例えば、平声第1韻の9字目は×中×右、11字目は×左×右、33字目は×右×右、平声第2韻の15字目は×圈×下、17字目は×下×右、18字目は×左×左、上声第2韻の18字目は×右×全、第3韻の3字目は×下×右、6字目は×頭×下、等である。写本と刊本の注釈には、わずかな違いがあることがある。例えば、平声第1韻の9字目(①04.2401) **祿** “序”の字形構造について、写本では「頭心頭右」と注釈するが、刊本では「始心頭右」とする。

字形構造の注釈を抄録するとき、刊本の順序どおりに抄録したのではなく、取捨選択して抄録したので、研究や利用する際には、以下の点に注意しなければならない。

- (1) 写本の書き手が、刊本の字形注釈の多くを抄録していないのは、書き手が、その字の構造が単純明解で、特に何らかの解釈を加える必要がないと考えたからであろう。
- (2) 書き手は「左・右・頭・下・中・圈・全」など、字を構成するのにどの部位を取るのかを指示する字をしばしば省略しているが、指示字なしでも明らかであると考えたからであろう。
- (3) 写本の字形注釈の一部は、比較的詳しくて、被注釈字が2字ではなくて、3字や4字から成るものがある。しかし、このときの注釈字に対する指示字も1字しかなかったり、あるいは全くなかったりする。例えば、平声第1韻10字目(①04.2402) **緇** “畦”の字形注釈は **緇** “地、一、種左”とあり、この字は“地”、“一”、“種”の3字で構成されており、指示字の“左”は最後の1字“種”だけの選択部位を指示している。また例えば、上声第12韻12字目(②05.2406) **翬** “毫光”の字形注釈は **翬** “身、鳳、毛、妙”とあるだけで、指示字はない。
- (4) 字形構造の注釈は、被注釈字の意味や字音と一定の関係があることが多く、被注釈字の字義や字音を斟酌すると、ある程度参考になる。

『文海宝韻』の刊本は権威のある著作であるが、写本の書き手は、原著者の意見に完全に同意しているわけではなく、自分独自の見解を述べることもあり、そのため刊本と写本にある字形構造に、異なる解釈が見られるのだ。ここには書き手の意図が存在するので、我々は格別に注意する必要がある。例えば

①06.1206 **翬** “乾”，刊本の字形注釈は **翬** “天右，翹下”とあり、写

本では 𡗗𡗗𡗗𡗗 “地，心，祖母下” とある。

- ①10.2106 𡗗 “園”，刊本の字形注釈は 𡗗𡗗𡗗𡗗 “園左，結左” とあり，写本では 𡗗𡗗𡗗 “園”，“手” の2字である。

- ①15.1605 𡗗 “争”，刊本の字形注釈は 𡗗𡗗𡗗𡗗 “争圈，不，和” とあり，写本では 𡗗𡗗𡗗𡗗 “争頭，不，合” とある。

- ①17.2606 𡗗 “地畦”，刊本の字形注釈は 𡗗𡗗𡗗𡗗 “地左，司全” とあり，写本では 𡗗𡗗 “耕，司” である。

なかには写本と刊本とで，文字構造の考え方や方式，使用文字の違いが現れているものもある。例えば

- ①28.2503 𡗗 “実”，刊本では 𡗗𡗗𡗗𡗗 “要圈，齊左” とあり，写本では 𡗗𡗗𡗗𡗗 “象頭，心，強” とある。

また刊本と写本の表現方法は異なるが，文字構造の実際の内容は，同じものもある。例えば

- ①08.1403 𡗗 “薄”，刊本の字形構造の解釈は 𡗗𡗗𡗗𡗗 “薄之右是” とあり，写本では 𡗗𡗗𡗗𡗗 “薄減左為” とある。

写本の書き手の考えが，独創的で斬新なときもあれば，刊本と大同小異のときもあれば，理解しにくい遺漏や錯誤も見られる。例えば

- ①09.1707 𡗗 “漢族の姓〔聞〕”，この構造字の4字目は「右」とあるが，大字と構造字を照合すると，4字目は「右」ではなく「左」でなければならない。

- ①25.1102 𡗗 “底”，刊本では 𡗗𡗗𡗗𡗗 “天全，界頭” とあり，写本では 𡗗𡗗𡗗𡗗 “天全，界下” とある。この字は「天」の上部と「界」の下部から構成されるので，写本にある“界下”は誤りである。

字形注釈は，実際にその文字がどのように造られたのかを解釈するものである。構造を注釈するときは，まず左側を，次に右側を造り，まず上部，次に下部を造るはずだ。しかし写本には逆の場合が見られる。例えば，①24.1201 𡗗 “垢”，刊本の字形の注釈は

𡗗𡗗𡗗𡗗 “汗左，垢左” とあり，“汗”の左側がこの字の左側を造り，“垢”の右側がこの字の右側を造ることを表す。しかし，写本の字形注釈は 𡗗𡗗𡗗𡗗 “垢右，水左” とあり“垢”の左側がこの字の右側を造り，“水”の左側がこの字の左側を造ることを表して，まず右，次に左となっており，これは原則から外れている。

写本の字形注釈には，被注釈字で注釈している（自分で自分の説明をする）ものがあり，これは『文海宝韻』の字形構造注釈の原則に符合せず，刊本とも一致しない。例えば，

- ①28.2401 𡗗 “槐”，刊本では 𡗗𡗗𡗗𡗗 “樹頭，毒右” とあるが，写本では 𡗗𡗗𡗗𡗗 “樹頭，槐下” とあり，被注釈字で被注釈字を解釈している。

（2）字義の注釈

刊本で字義を注釈するときは，まず被注釈字を最初にして，次に×“者”（×とは）を続け，解釈を書いてゆく。一方，写本の字義注釈は，簡略化されて，被注釈字が現れないのが普通である。稀に現れることもあるが，例えば，第1韻10字目（①04.2402）や第2韻9字目（①05.1503）などのように簡単な縦線（|）で表される。また注釈の中に被注釈字が使われるときも，例えば第1韻49字目（①05.1202）のように縦線（|）で表される。同

様に、書く手間を省くため、同じ字が続くとき、2字目を「ク」に似た符号を用いる。例えば、平声第8韻38字目(①07.1504)の注釈“推推操操”や“深深”の重複字にはこの符号が使われている。こうした符号は、敦煌から出土した漢文文献で早くに使用されているので、西夏文文献のこうした現象は、漢字文化の影響を受けたことは明らかである。

写本『文海宝韻』の中の字義注釈は非常に少なく、しかも簡略である。刊本の字義注釈は、同義語や類義語が一つか複数羅列されるのが普通で、専門的な解釈が見られることもある。写本の抄録者は、簡単明瞭な字には字義の注釈は書かず、たとえ字義の注釈を書いたとしても、簡略で、一番重要な注釈だけを書き、その他は省略している。平声部分は、刊本には詳細な注釈があるのに対し、写本の注釈は、その字の主要事項だけを強調しているので、参考にする価値はある。例えば

平声第1韻10字目(①04.2402)𪛗“哇”，写本には字形と字義の注釈があるが、字義の注釈には“哇者初土開哇種也”とあるが、刊本の字義注釈には“哇 者初未種土上開哇種之謂也”とある⁽²⁷⁾。

平声第1韻24字目(①04.2601)𪛗“設置”，字義の注釈には“設置，言辭也”とあるが、刊本の注釈には“設置，允也，云謂也，辭也，說也，意也，言辭說之謂也”⁽²⁸⁾とあり、詳細で複雑である。

平声第67韻1字目(①23.1602)𪛗“人”，刊本の解釈は“人也，人也，族也，者也，人也，民庶也，人民也，地上人之謂也”⁽²⁹⁾とあり、類義語で解釈し、細かく列挙している。写本では“一切人之謂也”と、簡潔で概括的である。

平声第75韻28字目(①25.2701)𪛗“撮”，量詞で、刊本の解釈は“十粟一粒，十粒一圭，十圭一撮，十撮一抄，十抄一合，十合一升，算量起處是也”⁽³⁰⁾とあるが、写本では“麦粟算用也”と用途を明記するだけである。

この他、写本の字義の注釈に刊本と異なる箇所があり、いっそう比較する価値がある。例えば

平声第1韻48字目(①05.1202)𪛗“墳”，刊本の注釈は“棄屍場建墳地用之謂也”⁽³¹⁾とあるが、写本の注釈は“棄屍墳，作壘也”とある。これにより、西夏の墳墓とは、塚あるいは盛り土で造られたものであったことが明確になった。

平声第11韻51字目(①08.2109)𪛗，刊本の注釈は“紫顏色也”⁽³²⁾とあり、元の訳文は“紫”，漢字の注音は〔西〕である。写本の注釈は“樹果也”とあり、樹木の果実を指していることは明白である。そこで刊本と写本の解釈を合わせ、この字が“樹”の字から構成されている点を考慮すると、字義は「紫色をした果実を結ぶ樹」、つまり“桑樹”とすべきであろう。

平声第68韻4字目(①24.1104)𪛗，刊本の注釈は“先生：先生也，主落胎之謂也”⁽³³⁾とあり、意味は、胎児が早く生まれ落ちるという事情そのものを解釈しているようだ。写本の注釈は“不成也”，つまり胎児が早産で死ぬという結果で字義を解釈している。2つの解釈を総合すると字義はいっそう明確になり，“早産”と訳せるだろう。

写本の字義の解釈に誤りが見られることもある。例えば

平声第75韻16字目(①25.2407)𪛗“窄”，刊本の注釈は“狹窄也，逼也，不寬坦之謂也”⁽³⁴⁾とあり、字義は明確である。しかし写本の字形の構造は“狹，窄”と間違いないが、解釈は“寬坦也”とある。これは明らかな誤りである。

(3) 反切の注音に関して

『文海宝韻』は韻書なので、字音を特に重視し、被注釈字にはすべて反切法で注音してある。もしある字の読み方が分からなければ『文海宝韻』でその反切法上下字を知り、その字音をつなぎ合わせればよい。こうした方法は古代インドの声明学に源を発し、中原地区の漢語音韻学に応用され、当時としては語音を正確に分析し注釈する、科学的な方法であった。西夏の学者が自己の民族言語の発音を表すのに、躊躇せず反切法を採用したのは、当時でも注目すべきことであった。しかし写本『文海宝韻』は刊本の反切上下字を記していない。書き手が西夏文字の字音をよく知っていたので、反切上下字の表示は必要ないと考えて、字音の注釈のすべてを省略してしまったのであろうか。私たちには知るべきがない。

写本『文海宝韻』は、私たちが西夏文字が属する韻（特に上声）を確定するときに重要な働きを果たすのは確かだが、『文海宝韻』の抄録者が西夏文字の字音注釈を無視したせいで、今の私たちの力量では、西夏文字の字音を確定ことは、如何ともしがたくなってしまった。特に刊本では、欠けている上声韻と入声韻の字の発音を研究するときには、刊本『文海宝韻』と『音同』の“同居韻”という注音材料、あるいはその他の注音材料の助けを借りざるをえないのだが、せつかくの写本には反切上下字がないし、その他の参考資料もないため、今なお読音の再構ができない字があるのだ。

さらに注意すべき点は、もともと刊本『文海宝韻』では、独字の後の反切上下字で、その字と次に来る同音のグループとを、あるいは同音でない別の独字とを区別していたのに、抄録者が反切上下字の注音を省略してしまったせいで、お互いが同音でないことを示すものがなくなったことである。かろうじてこの抄録者は、同音字をグループ化させ、同じ反切字で示せる同音のグループであることを示す、小さな丸だけは、大部分を記録している。しかし、逆にこうしたことで、大いに混乱をきたした。本来刊本『文海宝韻』はこの小さな丸と、独字の反切上下字とで、同音か否かを区分してきたのが、写本ではその区分が難しくなってしまった。小さな丸と丸の間の西夏文字は、必ずしも同音字ではなく、もしも2つの丸の間は同音字のグループと考えると、それは間違いである。平声第10韻の始まりの部分を例にしてみよう（数字は文字の順番，“独”は独字，“同”は同音字を示す）。

刊本： 1 独（反切上下字） 2 独（反切上下字） 3 同（反切上下字切三）
 4 同 5 同○ 6 同（反切上下字切三） 7 同 8 同○
 9 独（反切上下字） 10 同（反切上下字切七） 11 同 12 同
 13 同 14 同 15 同 16 同○ 17 同（反切上下字切四）
 18 同 19 同 20 同○ 21 同（反切上下字切四） 22 同
 23 同 24 同○……

以上24字は、独字が3字、同音グループが5つの、合計8つの異なる音節を表す。

写本： 1 2 3 4 5○ 6 7 8○ 9 10
 11 12 13 （1字遺漏） 14 15○ 16 17 18
 19 20 21 22 23○……

同様にこの24字（1字遺漏）では、同音グループが4つある印象を持たせるが、実際には8つの異なる音節があるのである。そこで写本『文海宝韻』を利用し研究するときには、その音節の区分に十分注意する必要がある。

(四) 上声韻の補充と分析

写本『文海宝韻』の収録文字はかなり完全である。刊本『文海宝韻』は合計3063字を収めるが、西夏文字全体の過半数を占めるに過ぎない。これに対し、写本『文海宝韻』には西夏文字がほぼすべて収められ、これによって、西夏文字の半数近くを占める上声と入声韻のすべての文字を補足できるだけでなく、刊本と雑類の欠落部分、例えば平声では45ページの左面と、46ページの左右両面と、47ページの右面、雑類では1ページの左右両面と、8ページの左面と、12ページの左面と、13ページの右面と、16ページの左面などを補填することができる。『文海宝韻』は韻類を明確に区分しているので、平声、上声と入声部のすべての字について、その字がどの韻に属するのかは明瞭なはずである。ここで平声字の韻属は刊本と写本の『文海宝韻』でそれぞれ分かるが、上声字に関しては、写本『文海宝韻』に依らざるを得ない。ネフスキー教授は、資料が身近にあった利点を活かして、早くも30年代にこの貴重な文献を使い、それぞれの字の韻を記録しておいたので、後にこの文献が行方不明になっても、後世の研究者はこのネフスキー教授の記録から、その字の韻類を知ることができた。しかし、『文海宝韻』の上声部のそれぞれの韻の中では、どのように配列されていたのか、どのような注釈が付けられていたのか、依然として知る手だてがなかった。ところが現在、『文海宝韻』の所在が判明し、いちはやく学界に公開されたので、研究者は影印を自分の眼で見ることができ、『文海宝韻』上声のありのままの姿を、余すところなく理解できるようになった。

写本『文海宝韻』の上声は86の韻があり、それぞれの韻に属する字数は異なり、最も多いものは33韻の 107字、少ないものは50韻、67韻、84韻のそれぞれ4字で、合計2090字を収める（いくつかの残欠部分は、その他の資料に依って補充可能な字を含む）。各韻の所属字数の分布状況は次の通り。

第 1韻	70字	第 2韻	36字	第 3韻	51字	第 4韻	15字	第 5韻	15字
第 6韻	21字	第 7韻	60字	第 8韻	18字	第 9韻	37字	第10韻	81字
第11韻	37字	第12韻	27字	第13韻	10字	第14韻	67字	第15韻	16字
第16韻	13字	第17韻	29字	第18韻	13字	第19韻	9字	第20韻	19字
第21韻	7字	第22韻	7字	第23韻	7字	第24韻	9字	第25韻	67字
第26韻	17字	第27韻	16字	第28韻	61字	第29韻	20字	第30韻	36字
第31韻	16字	第32韻	13字	第33韻	107字	第34韻	16字	第35韻	16字
第36韻	11字	第37韻	36字	第38韻	42字	第39韻	8字	第40韻	41字
第41韻	16字	第42韻	63字	第43韻	13字	第44韻	32字	第45韻	17字
第46韻	8字	第47韻	78字	第48韻	38字	第49韻	13字	第50韻	4字
第51韻	29字	第52韻	28字	第53韻	14字	第54韻	37字	第55韻	21字
第56韻	33字	第57韻	16字	第58韻	12字	第59韻	6字	第60韻	55字
第61韻	25字	第62韻	16字	第63韻	5字	第64韻	18字	第65韻	5字
第66韻	16字	第67韻	4字	第68韻	41字	第69韻	8字	第70韻	16?字
第71韻	22?字	第72韻	35字	第73韻	35字	第74韻	13字	第75韻	9字
第76韻	28?字	第77韻	22字	第78韻	18字	第79韻	7字	第80韻	12字

第81韻 15字 第82韻 13字 第83韻 5字 第84韻 4字 第85韻 15?字
第86韻 5?字 合計 2,090字

上声の注釈形式は、平声と同じである。注釈があるものもあれば、ないものもある。例えば、上声第1韻70字のうち、字形に対する注釈があるものは29字、字義に対する注釈があるものは1字、字形と字義の二つ揃った注釈があるものは3字、全く注釈がないものが37字である。各韻の字の配列順序は、大体声母九品音の順になっているが、一つの韻に声母九品音の順が2度あるいはそれ以上繰り返されることもある。例えば、第1韻の初めは重唇音が3字、その後舌頭音が5字、牙音が7字、齒頭音が5字、喉音が9字、来日舌齒音が3字とあり、その後また齒頭音が2字ある。第2韻では重唇音が1字、その後来日舌齒音が3字、軽唇音が2字、正齒音が7字、喉音が8字、その後また正齒音が3字、来日舌齒音が12字と続く。そのうち後者は、初めの重唇音の後に、来日舌齒音が来るというその位置が、何とも分からない。この来日舌齒音3字は、漢字の注音では〔乳〕であり、日母に属すが、『文海宝韻』の作者はこの音が軽唇音に近いと思ったのか、あるいは軽唇音に帰属させようとしたのであろうか。

特に強調しなければならないのは、写本上声部（入声部には字義の注釈が見られない）の字義の注釈は、重要な価値を持つことである。なぜなら刊本の該当部分はすでに失われているからだ。近代の西夏文研究にはすでに百年の歴史があるが、ハラホトでの大量の西夏文献の発見から90年近くがたった。この間、数世代の人の努力により、西夏文字の読解は、少から多へ、簡から繁へと進展を続けている。とくにここ20年あまりに、ほとんどすべての西夏文字の字義は明らかにされ、西夏文献の読解水準も飛躍的に向上した。西夏文字の意味と語法をしっかりと掌握した専門家には、西夏人が著述した長篇文献の解釈も可能である。しかし遺憾ながら、西夏文字にはまだ字義が解明されていない字もあり、我々が西夏文献の翻訳や解釈を進めるときも、ふとこの「道をさえぎるトラ」に遭遇することがあるので、翻訳や解釈が難しいその箇所は、空白にしておくか、疑問符号を打たざるをえない。しかしこうした字義不明の字の大部分は、上声字である。現在、写本『文海宝韻』の上声字の難解な字のいくつかには、簡単な注釈があるので、西夏文読解の難所を突破するのに、それらが重要な意義を持つことは、言を待たない。例えば

上声で最初に字義の注釈がついた字、即ち第1韻17字目（②02.1503）𐰽について、これまでである専門家は、彼の著書『同音研究』の中で“地名或人名”⁽³⁵⁾と解釈し、『夏漢字典』の中で“地名也”⁽³⁶⁾と解釈しているが、写本『文海宝韻』では“密謀也”と解いており、『音同』のこの字の解釈でも“謀”とあり、“謀”あるいは“密謀”の意であると分かる。

また例えば、上声第2韻23字目（②03.1108）𐰽について、『同音研究』では釈義がないが⁽³⁷⁾、写本『文海宝韻』では“遺留也”と解いている。

ある字は、これまでにその字義は分かっていたが、写本『文海宝韻』の字義の注釈を通して、一層明確になった字もある。例えば

上声第15韻3字目（②06.2302）𐰽は、『番漢合時掌中珠』で、他の字と単語を構成し“綿帽”という漢字の注釈があり⁽³⁸⁾、ここからしか、この字の意味は知ることができなかった。『掌中珠』は西夏語と漢語の、相互に意味と読みを付けたあっただけの単語集であ

って、一つ一つの字に対して、多くの言葉を使って詳細な解釈を付けることはあり得ない。しかし写本『文海宝韻』では、この字について“〔綿帽〕臣宰帝处界戴也”とある。まず西夏文字で漢語の音〔綿帽〕を表示し、次に、この綿の帽子は大臣たちが皇帝のところでかぶる、つまり朝見する際に限ってかぶる帽子であることを述べている。こうして我々はこの字の、より具体的で、より確かな意味を知ることができるのである。

上声第1韻20字目(②02.1601)  は、これまで「濃い血」の意とされてきたが、写本『文海宝韻』の字義の注釈では「馬の傷口から流れる血」とある。

上声第30韻11字目(②09.1301)  “輿”には“車上作美帳”という詳しい注釈があり、美しい帳を取り付けた車という意味である。

上述の例から、写本『文海宝韻』の字義の注釈が、いかに重大な価値を持ち、この本の解釈が、いかに我々の西夏語文献の読解水準を大きく向上させることができるかがわかるであろう。しかし残念ながら、こうした字義の注釈は上声部では比率が低く、しかも後になればなるほど字義の注釈は少なくなる傾向にある。例えば、本文1頁第1面(②02.1)には31字の大字があるが、字義の注釈があるのは4字、第1頁第2面(②02.2)には54字の大字があるが、字義の注釈は1字もない。第2頁第1面(②03.1)には62字の大字があるが、字義の注釈があるのは2字、第2頁第2面(②03.2)には67字の大字があるが、字義の注釈は1字もない。写本の書き手が、簡略化のため、ほとんどの字義の注釈を省略したせいで、私たちが刊本の欠落部を補充するのにとって、大きな痛恨事となっている。

しかし幸いなことに、前述したロシア所蔵の黒水城文献に『音同』(残欠本)があり、その裏面に一字一字の字義が書き込まれてある。この注釈の多くは、小さな行草書で書かれていて識別や解釈が難しいが、西夏文字の草書の規則を習得し、草書体西夏文字の読解力が向上すれば、それもできないことではない。この文献の翻訳と解説がなされれば、西夏文字の字義の読解は、大きな前進を遂げることも可能となろう。

写本『文海宝韻』上声部の字形構造の注釈は、その注釈自体が、字義や字音と直接関係があるので、西夏文字の字形構造を研究するための新しい資料となるだけでなく、字義や字音を研究するための重要な参考資料ともなる。字形構造の注釈は字義の注釈の比率よりも大きく、その価値は軽視できない。例えば

上声第1韻の5字目(②02.1306)  “哄散”，字形構造の注釈は  “喚”と  “散”の2字，文字の左側は“喚”の一部分，右側は“散”の一部分から成るとある。私たちはここからこの字の字形構成を知るだけでなく、一歩進んで、字義は「叫んで追い払う」という意であることがわかる。

上声第10韻の4字目(②04.2603)  “吾”，字形構造の注釈は  “属有”と  “我”の2字，文字の左側は“属有”の一部分，右側は“我”の一部分から成るとある。私たちはここからこの字の字形構成を知るだけでなく、一歩進んで、字義は一般の“吾”ではなく、属格の意を持つことがわかる。

上声第12韻の5字目(②05.2307)  “紅”，字形構造の注釈は  “肉”と  “色”の2字，文字の左側は“肉”の一部分，右側は“色”の一部分から成るとある。私たちはここからこの字の字形構成を知るだけでなく、一歩進んで、字義は一般の“紅”ではなく、“肉紅色”の意を持つことがわかる。

字形構造を注釈するとき、刊本『文海宝韻』と同じように写本でも、複雑な字で簡単な

字を注釈したり、字と字を循環論で注釈する現象が見られる。

上声第37韻の24字目(②10.2602) **𐵓** "夜"〔令〕, 字形構造の注釈は **𐵓𐵔𐵕** "昏〔令〕左減為", つまりこの字は“昏”の字の左側を取り去る。

上声第56韻の24字目(②14.1401) **𐵓** "十", 字形構造の注釈は **𐵓𐵔𐵕** "万, 三, 庫左"。確かに数字の“十”は, “万”“三”“庫”の3字から成るが, もっと煩瑣で, これを以ては理解しがたい。恐らく本来の文字の作られ方とは違うのであろう。

写本の上声部は平声部と同じように, 字形構造の注釈に不適切な箇所がある。例えば上声第44韻の4字目(②12.1311) **𐵓** "物", 字形構造の解釈は **𐵓𐵔𐵕** "変下, 居右"とあるが, この字の上部には言及がなく, 『文海宝韻』の字形構造の注釈の原則に合致しない。しかしながら, こうような不正確な字形構造の注釈は極めてわずかである。

(五) 入声字の発見と分析

西夏語の声調に関して, これまでの西夏学界では, 平声と上声の2つの声調があるだけと考えられてきた。西夏文『五音切音』の序に「今, 各種の文字を視るに, 西天・姜・漢にすでに切韻あり。今, 文字の五音とは, 平上去入の各自の字母すでに明らかなり」⁽³⁹⁾とあっても, ここで言う「平上去入」が西夏語を指すのかについては断定が難しい。『音同』(甲種本)では, 声と韻が同じか否かを重視し, 声調は軽視し, 声調が違っても同音としているし, その序の中でも声調に関する手掛かりが提供されていない。刊本『文海宝韻』平声部の版心には「文海平」と明記され, 雑類部でも明確に「平声」と「上声」の2類に分かれているので, 西夏語には確かに平声と上声があることはわかる。写本『文海宝韻』では平声と上声だけでなく, 何度も入声に言及している。前述のように, 「文海宝韻上声入声第二」「大白高国文海宝韻上声入声第二」とあり, さらに上声と入声の最後に小さな行草書体の字で「……月十五日日切韻上声入声 竟」と(欠けているが)題款がある。以上の記述をもとに, 私たちは『俄藏黑水城文獻』第七冊の内容提要で, 写本『文海宝韻』を紹介し, 「本書は平声, 上声と入声, 雑類の三部に分けられる。平声九十七韻, 上声と入声八十六韻, 韻の順に並ぶ」⁽⁴⁰⁾とした。しかし西夏語の入声字は一体どこにあるのだろうか。最初に写本『文海宝韻』を使用したネフスキー教授も平声字と上声字を記録したにすぎない。近年学者たちが再びその所在が明らかになった『文海宝韻』を眼にして, その中に入声字があるか否かに非常な関心を寄せたのも, もっともである。西田龍雄教授の最近の研究成果でも, やはり西夏語に入声はないとしている。彼は『文海宝韻』をみると「平声第一」に対して, 「上声入声第二」となっている。しかし特に入声韻の項はなく, 入声韻と指示している文字もない。筆者(西田教授)は, 西夏人は古い入声はすべて上声に帰属したと考えていたのではないかと推測する」⁽⁴¹⁾と言っている。西夏語に本当に入声がないのか, 入声字が上声に帰属したのか。筆者は写本『文海宝韻』を検討し研究した結果, 西夏語に入声字は存在する, と考えた。

ここで, 写本『文海宝韻』の「上声入声第二」の最後の2枚(『俄藏黑水城文獻』第七冊 222頁 91,92)を分析してみよう。

(まず始めに断っておくが) 最後から2枚目の元の紙面(すなわち91)は, それぞれ3枚

の断片が上下につながっているのだが、つなぐとき最初の1枚目が1行ずれてしまった。さて、この面(すなわち91)の1行目から上声第81韻が始まり、2行目から第82韻が始まり、4行目から第83韻と第84韻が始まり、5行目から第85韻が始まり、7行目、即ち本面の最後の行から第86韻が始まる。韻類代表字は欠けているが、西夏文字の「八十六」の3文字は、はっきりと読み取れる。下にはこの韻に属する4字があり、その下にはまだ1～3字が欠けているかもしれない。最後の頁(すなわち92)は、上部が欠けて、下部は2枚がつながっている。1行目には欠けた字が残り、行全体の上から三分の一のところの真下に、欠けた1字があるが、これは前面の86韻から続く字とすべきである。この字の下は空白なので、この字が上声韻の最後の第86韻の、最後の1字であることがわかる。2行目の残存している下の三分の二も空白である。3行目と4行目は平声や上声のような形式で、この二行には大字と注釈があり、大字は12字ある。もし上部が残っていても、せいぜい20字前後であろう。5行目は上述した「……月十五日日切韻上声入声 竟」という小さな行草書体の字である。以上から、ここで上声と入声すべて終了したことがわかる。こう考えると、1行目で上声が終了し、5行目で上声と入声を終了した中間部分、即ち3行目と4行目は、入声部分とすべきである。3行目の空白の欠けた部分には、入声の開始を表示する文字、恐らく「入声」の2文字があったと考えられる。この、数は少ないが鍵になる2文字が欠けていたために、長い間西夏語の入声字が探せなかったのである。

上述の分析研究を通し、西夏語に入声字があることが明確になった。西夏語の入声は、平声や上声とは違った別の調類である。ただ入声字の字数が少ないため、西夏人が『文海宝韻』を編纂するとき、それに対して単独の部を立てず、上声部の後に置いて、“上声入声”部としたのである。

写本『文海宝韻』に残る13の入声字のうち、10字が完全に読み取れる。3行目の1字目(②18.1301)は欠け、2字目(②18.1302)𐽀“圍繞”と3字目(②18.1303)𐽁“姻親”はともに独字で、発音は不詳、4字目(②18.1304)𐽂“才”と5字目(②18.1305)𐽃“印”と6字目(②18.1306)𐽄“牧”は舌頭音、漢字の注音は〔能_h〕、以下の2字は欠けているようだ。4行目の1字目(②18.1401)𐽅“逼”と2字目(②18.1402)𐽆“迫”はともに舌頭音、漢字の注音は〔他〕、3字目(②18.1403)𐽇“斜”は誤写であるが、喉音の独字、4字目(②18.1404)𐽈“輕”は正齒音、漢字の注音は〔室〕、『音同』では平声第29韻と上声第25韻とで同音連語を成す。5字目(②18.1405)𐽉“愚”は来日舌齒音の独字、漢字の注音は〔勒〕。『同音研究』という本では、1字目を上声第21韻と誤り、2字目を上声第25韻と誤り、9字目を平声第29韻と誤り、その他は「音韻未詳」とする。近刊の『夏漢字典』でも1字目を上声第21韻と誤り、2字目を上声第25韻と誤り、9字目は平声第29韻から上声第27韻に改めたが、当然みな正しくない⁽⁴²⁾。

現存する入声字からは、その韻類を区分する表示は見つからない。西夏語の入声字は確かに数は少ないが、その発見は西夏語に大きな助けとなり、特に声調研究の深化に寄与するであろう。

西夏の言語学者は、西夏語の声調を分析するとき、漢語音韻学の術語と方法を借りてそれを使用したものの、漢語に見られる平声・上声・去声・入声の4つの調類を確定したのではなく、実際には、当時の自己の言語を拠り所にして、平声・上声・入声の3つの調類の存在を確定したに過ぎなかった。唐代では4つの調類を「平声は哀にして安、上声は励

にして挙，去声は清にして遠，入声は直にして促」と記述されたが，この記述と中古漢語の声調の特徴を参考にすると，西夏語の平声も平ら調子，上声も昇り調子，入声はあるいは閉塞韻尾か，という推測が可能である。入声字の字数は少なく，平声と上声の字数に比べればその差は歴然としているが，このことは西夏語が発展していく過程で，入声がまさに消失しようとする痕跡なのかもしれない。西夏語の入声の問題に関しては，今後さらに一層の深い調査研究が待たれる。

(六) 雑類のつなぎ合わせと補充及び分析

写本『文海宝韻』には雑類があるが，惜しいことに，すべてが細かな残片である。大小合わせて42枚の残片が『俄藏黒水城文獻』に35枚が収録され，大きな残片には22字の大字があり，小さな残片には大字が1字しかないものもある(『俄藏黒水城文獻』第七冊，223-231頁，文献整理番号93-109)。この42枚の残片は，正しい順番に配列されている訳ではなく，刊本に収められていない字も多いので，こうしたばらばらな残片を正しい順序につなぎ合わせることは，難しい作業となった。現在，刊本と対照させて，文字の声韻を調査し，文献の残片部の切断面をつなぐことで，ようやく全片のつなぎ合わせに成功し，合計12面になった。

- 第1面は3枚から成る : i 109-8 ii 93上 iii 95上
 第2面は3枚から成る : i 93下 ii 94上 iii 96下
 第3面は5枚から成る : i 109-7 ii 109-3 iii 94下 iv 95下 v 96上
 第4面は4枚から成る : i 98上 ii 109-6 iii 97下 iv 8364-95上
 第5面は5枚から成る : i 109-2 ii 98下 iii 99上 iv 8364-105-1 v 99下
 第6面は5枚から成る : i 100下 ii 100上 iii 8364-104上 iv 109-5 v 109-4
 第7面は2枚から成る : i 101 ii 1023下
 第8面は5枚から成る : i 109-1 ii 8364-105-2 iii 8364-105-3 iv 103上 v 102上
 第9面は3枚から成る : i 103下 ii 104下 iii 105上
 第10面は4枚から成る : i 106 ii 107上 iii 104上 iv 8364-105-4
 第11面は1枚 : i 105下
 第12面は2枚 : i 108 ii 8364-105-5 合計 42枚

つなぎ合わせた『文海宝韻』雑類部には合計 316字を収める⁽⁴³⁾。しかし刊本と比較することで，決して少なくない新しい材料を加えることができる。まず新字を加えると，平声で28字，上声で25字が増える。もし刊本の雑類や西田龍雄教授が抄録した雑類の残片を，この写本と照合したり，『音同』乙種本やその他の資料を参考にして，同音字を補填したりする方法で，さらに新字を補充すると，ほぼ完全に近い雑類部分を得ることができる。

雑類字数統計表：

	刊本	写本	写本への補充	併せ本
雑類平声				
(1) 重唇音	0	3	0	3
(2) 軽唇音	0	2	0	2
(3) 舌頭音	0	4	0	4

(4) 舌上音	2	3	0	3
(5) 牙 音	6	6	0	6
(6) 齒頭音	106	83	23	106
(7) 正齒音	74	66	17	83
(8) 喉 音	19	11	10	21
(9) 來日舌齒音	74	49	25	74

雜類上声

(1) 重唇音	0	1	0	1
(2) 輕唇音	0	1	0	1
(3) 舌頭音	0	7	1	8
(4) 舌上音	0	2	0	2
(5) 牙 音	2	4	2	6
(6) 齒頭音	80	38	44	82
(7) 正齒音	64	30	40	70
(8) 喉 音	13	6	7	13
(9) 來日舌齒音	46	29	46	75

合 計	486	345	215	560
-----	-----	-----	-----	-----

上の表から分かるように、刊本『文海宝韻』の雜類部分には（欠けてはいるが）486字を収め、写本も欠けているが345字を収めるが、この2つを校勘して215字を補充し、合計して560字が得られたが、現在補充が難しい残欠部分にも、なお20字ほどはありそうである。

写本『文海宝韻』のもう一つの重要な意義は、雜類部分の九品音の名称を増やしたことである。もとの刊本の雜類部分は残欠のため、平声、上声中に見られる九品音類の名称は少なく、わずかに平声韻の牙音・齒頭音・正齒音・來日舌齒音があり、上声韻の齒頭音・來日舌齒音があるに過ぎず、体系上の不完全さが拭えなかった。写本では、字数の増加はさほど多くはないが、増えた部分は肝腎なものであることが多く、九品音が基本的に揃った。最初に「平声」の2字があり（刊本にはない）、その後に*重唇音・*輕唇音・*舌上音・牙音・齒頭音・正齒音・*喉音・來日舌齒音があり、上声部には*重唇音・*輕唇音・*舌頭音・*舌上音・*牙音・齒頭音・正齒音・*喉音・來日舌齒音がある（*が付いたものは刊本では欠けており、写本では残っている声類の名称を示す）。

各声類の名称とその所在位置を知ること、各類に所属する字がどの程度あるかの統計がとれるなり、あるいは大体の算出ができるので、『文海宝韻』雜類部分の構成を全面的に把握でき、西夏語の声韻体系を深く研究するのに役立つ。

これまでの一般の伝統的な音韻学的視点からすると、声と韻と調ですべての字を統括できてきた。それなのに西夏語では、なぜ平声韻と上声韻と入声韻以外に「雜類」部をわざわざ別に作ったのであろうか。この部分には600前後の字があり、西夏文字全体の約1割を占める。そんなこともあってか、これまでの西夏語研究の専門家は往々にして、『文海宝韻』の雜類部分をあまり重視してこなかった。しかし、漢語音韻学の神髓を会得した西夏の言語学者たちが、勝手に蛇足を加えたり、屋上に屋を架すようなまねができるはずが

ない。彼らは、何か伝統的な音韻学では分析や処理が難しい言語事象に遭遇したのかもしれない。こうした処理方法について、現代人がいくら考えてもその訳がわからないのは、逆に、我々の西夏語に対する理解が足りないせいなのかもしれない。そのため我々は、この疑問を軽視してはいけないし、ましてや疑問そのものを軽く否定してはならないのである。

雑類部に所属する字を分析すると、以下の点に注意する必要があることがわかる。

1. 雑類部に所属する字の声類の分布がアンバランスである。

雑類の平声にせよ上声にせよ歯頭音・正歯音・来日舌歯音の3類に字が集中し、合計 490字、雑類総数の87%以上を占める。西夏語では字数が多いはずの重唇音・軽唇音・舌頭音は、雑類の中では非常に少ない。これはある一定の西夏語の声母の特徴を反映しているのであろうか。

2. 雑類部に所属する字に対する漢字による注音は、2字で行う注音が多いのは、それらの声母が、多くは濁音や鼻冠濁音に属するからである。

これは雑類の60%を占める歯頭音と正歯音で最も顕著である。これは雑類の声母の特徴と関係があるのであろうか。

3. 雑類部に所属する字の韻類の分布もアンバランスである。

すでに明らかになった韻類の雑類では、平声類の62%の韻に雑類字があり、上声類の54%の韻に雑類字がある。雑類字を持たない韻は多くは3等あるいは4等に属す。

我々の西夏語の雑類に対する認識は、まだ皮相なものかもしれない。これは研究を深化させる重要な問題である。

(七)『文海宝韻』と『音同』との関係

『文海宝韻』は声韻で束ねた韻書で、『音同』は声母で束ねた韻書で字書である。この両者はどちらも西夏語を記録し描写したもので、密接な関係にあるのは当然である。しかし『音同』には多種の版本があり、ここではそれらと『文海宝韻』はどのような関係にあるのか、まずは『音同』の各種の版本の間にある異同を見てみたい。

『音同』は西夏文の字書で、比較的完全な収録で、約6000前後の字数を収める。これらの字は九声で分類し、その順序は、重唇音・軽唇音・舌頭音・舌上音・牙音・歯頭音・正歯音・喉音・来日舌歯音となっている。それぞれの声類の内部は、言ってみれば、同じ発音の字を一つの紐にまとめ、それぞれの紐は小さな円で閉じたようになっている。声類の後ろには同音字のない独字が列挙されている。一つ一つの字の下には、小字による注釈があり、簡略で、多くは1字、時として2字もあり、3字は例外的である。常に同義語・類義語・反義語を用いたり、あるいは大字と連語を成したり、あるいは類別や用途を明記したり方法を用いるが、音訳字の中には反切上下字で注釈するものもある。『音同』は西夏語研究にとって、重要な価値がある。しかし大きな声類があるだけで、具体的な声母は示されていないし、韻書ではないので、韻類を明記しているわけでもない。『音同』だけで西夏語を研究するのは難しい。一方『文海宝韻』は、声調と具体的な韻類を区別しているだけでなく、それぞれの韻紐、時には独字にも反切上下字があるので、それを根拠にする

だけで字の発音を知ることができる。そこで西夏語の言語、特に西夏語の語音を研究するには、この『文海宝韻』という資料を重視しなければならないのだ。『文海宝韻』は西夏の多くの学者が参与し、国家が頒布した韻書で、皇帝が序言を書いていることから、その地位の非凡さがわかるであろう。序言にはその編纂の状況を紹介した、「五音の字母は明らかになり、清と濁、平と仄は分かれ、軽と重は異なり、上下の品は明らかになり、切字は呼応し、韻母は摂と接し」という言葉があり、また、その場で敢えて「文字の本」と定義づけようともすることで、その編纂は慎重、かつ資料は確かであることを強調している。

『音同』には多種の版本が伝わっている。『音同』の序と跋、そして重校序に基づき、少なくとも五種類の版本が知られている。

- (1) 『音同』の最初の博士令□六犬長、羅瑞靈長による初編本
- (2) 後に学士の渾□白、勿明犬楽による改編本。前本と同時に流行
- (3) さらに学士の兀羅文信が前書二冊をもとに整理した刊本
- (4) 義長が元徳六年（1132年）に整理した刊行本
- (5) 徳養（梁徳養）が12世紀中晩期に校勘した刊本⁽⁴⁴⁾

ロシア所蔵のハラホト出土文献の『音同』には9つの整理番号があり、義長の整理本と徳養の校勘本の二種類に分けられる。我々は前者を甲種本、後者を乙種本と称している。二種類の版本は同一の著作の整理校勘本なので、体裁上は一致している。しかし同音字の組分けや独字の区分には大きな相違がある。『文海宝韻』にも同音字と独字の区分があるが、以下、平声第1韻を例に、『文海宝韻』と『音同』甲乙種本の関係を見てみよう。

平声第1韻第1組の4字。『音同』甲種本ではこの4字は同じ同音字の組にあるが、配列は『文海宝韻』と異なる。乙種本でもこの4字は同じ同音字の組にあり、配列は甲種本と同じ。

平声第1韻第2組の4字。『音同』甲種本ではこの4字を含む同音字の組には計7字あり、乙種本ではこの4字を含む同音字の組には計5字あり、甲種本にはあるが乙種本にはない2字については、乙種本では別の組を作り、『文海宝韻』では上声第1韻に属している。

平声第1韻第3組の6字。『音同』甲種本ではこの6字を含む同音字の組には計9字あり、乙種本ではこの6字は同じ同音字の組にあり、配列は『文海宝韻』とも甲種本とも異なる。甲種本にはあるが乙種本にはない3字については、乙種本では別の組を作り、『文海宝韻』では上声第1韻に属している。

平声第1韻第4組の4字。『音同』甲種本ではこの4字は同じ同音字の組にあるが、配列は『文海宝韻』と異なる。乙種本でもこの4字は同じ同音字の組にあり、配列は『文海宝韻』と同じ。

平声第1韻第5組の6字。『音同』甲種本ではこのうちの4字を含む同音字の組には計8字あり、乙種本ではこの6字は同じ同音字の組にある。甲種本にはないが乙種本にはある2字については、甲種本では他の4字と別の組を作り、その中の3字は『文海宝韻』では上声第1韻に属している。

平声第1韻第6組の2字。『音同』甲種本ではこの2字は同じ同音字の組にあり、配列は『文海宝韻』と同じ。乙種本でもこの2字は同じ同音字の組にあり、配列も同じ。

平声第1韻第7組の2字。『音同』甲種本ではこの2字を含む同音字の組には計3字あり、乙種本ではこの2字は同じ同音字の組にあり、甲種本にはあるが乙種本にはない1字については、乙種本では独字となっている。

平声第1韻第8組は独字。『音同』甲種本と乙種本の両方とも独字となっている。

平声第1韻第9組の4字。『音同』甲種本ではこの4字は別の2字とともに同じ同音字の組にある。乙種本のこの4字は同じ同音字の組にあり、配列は『文海宝韻』と同じ。甲種本のその別の2字とは、乙種本の中では同組にあり、『文海宝韻』では上声第1韻に属しているものである。

平声第1韻第10組の2字。『音同』甲種本ではこの2字は同じ同音字の組にあり、配列は『文海宝韻』と異なる。乙種本のこの2字も同音字の組にあるが、配列は『文海宝韻』と同じ。

平声第1韻第11組の5字。『音同』甲種本ではこの5字は同じ同音字の組にあり、配列は『文海宝韻』と異なる。乙種本のこの5字も同じ同音字の組にあるが、配列は『文海宝韻』と同じ。

平声第1韻第12, 13組の2字は独字。『音同』甲種本ではこのうち1字目は、上声第1韻に属す別の字とともに、同じ同音字の組にあり、2字目は独字である。乙種本の2字はそれぞれ独字である。

平声第1韻第14組の3字。『音同』甲種本ではこの3字は同じ同音字の組にあり、配列は『文海宝韻』と異なる。乙種本でもこの3字も同じ同音字組にあり、配列も甲種本と同じ。

平声第1韻第15組の2字。『音同』甲種本では1字目が独字、2字目は別の4字とともに同じ同音字の組にある。乙種本ではこの2字は同じ同音字の組にあり、配列も『文海宝韻』と同じ。甲種本で2字目とともに同じ同音字の組にあった別の4字とは、乙種本の中では別な同音字の組にあり、『文海宝韻』では上声1韻に属しているものである。

平声第1韻第16組は独字。『音同』甲種本ではこの字が欠けている。乙種本では独字である。

平声第1韻第17組の2字。『音同』甲種本と乙種本でもこの2字はともに同じ同音字の組にある。

平声第1韻第18組の4字。『音同』甲種本ではこの4字の中の3字を収めていて、この3字を含む同音字の組には、全部で5字ある。甲種本のもう一つの字は別の字とともに別な組を作り、『文海宝韻』では上声1韻に属している。乙種本ではこの4字は別の1字とともに同じ同音字の組にあり、その4字の配列は『文海宝韻』と同じ。

平声第1韻の最後の6字はそれぞれ独字。『音同』甲種本では最初の1字が別の3字とともに同じ同音字の組にあり、2字目と3字目はそれぞれ独字、4字目は他の2字とともに同じ同音字の組にあり、5字目は独字、6字目は欠けているが、独字とすべきである。乙種本では最初の1字が欠けているが独字と思われる。2字目・3字目・4字目・5字目・6字目はどれも独字で、『文海宝韻』と同じであろう。

以上から分かることは、『文海宝韻』の韻の分け方は『音同』乙種本に近く、平声と上声の区分を根幹に置き、声母と韻母が同じでも声調が異なれば別な語音と見なしている。一方の『音同』甲種本では、平声韻と上声韻をいっしょにして同じ語音と見なしている。

さらに、『音同』乙種本は、『文海宝韻』より語音の区別が細かく、『文海宝韻』で同音字の組に置かれる字が、『音同』乙種本では独字と見なされている例もある。このことは第8, 10, 12韻で見られる。

『音同』乙種本を校勘した梁徳養は、当時の西夏の著名な学者で、多くの著作が伝えられ、西夏の文化に多大な貢献をした。彼は『音同』の重校序の中で「徳養、この書の雑混たるを覚え、『文海宝韻』と仔細に校勘す」と書いている。元の『音同』は『文海宝韻』との照合が行われず、平声と上声が区分されていなかったのかもしれない。ここで梁徳養が校勘したことで、はじめて新しい変化が生まれたのだ。『文海宝韻』が編纂されて百年余りが経過したところで、はじめてこの西夏の言語学者が、その時代の要望に答えて『音同』を校勘した、つまり『音同』に大手術を施して、西夏語の実情に合わせた訳だ。

(八)『文海宝韻』と西夏語の発音

西夏文字が反映する西夏語は、すでに死語となり、今日では西夏語を使う人はいない。そこで人々は西夏文字の解説を始めるに当たり、把握が可能な限りの資料を通して、西夏語の発音を分析研究を試みた。

西夏文字に付けられた漢字の注音は最もわかりやすいので、まず専門家がこれを重視し利用した。西夏語と漢語の双方向から解釈した語彙集である『番漢合時掌中珠』にある西夏文字には、漢字の注音があり、西夏語の発音研究に対し、非常に重要な資料を提供した。しかしこうした注音で使われる漢字は、800～900年ほど前の西北地区の漢語の発音なので、現代漢語で読むことはできない。しかも、ある一つの言語と別な言語の間には、声・韻・調の違いがあつて当然なのだから、ある一つの言語を別な種類の言語で注音するのに、無理な操作をして不正確な状況が出てくるのは、どうしても避けがたい。たとえ『掌中珠』の作者である骨勒茂才が、その科学性を大いに高めるような、多くの補助な手段を使つての注音を施してあつても、現代人がそれを利用しようとするれば、やはり不都合を感じてしまう。他にも、西夏文の仏教経典や漢字文献から翻訳した西夏文文献には、西夏文字と漢字の対音資料があり、大いに参考にする価値はあるが、こうした文字は非常に限られ、その対音の体系性や科学性は『掌中珠』に及ばない。

さて、反切法による注音は、科学的で厳密な方法である。西夏の言語学者たちはこの方法を、中原の漢族の地からうまく拝借している。『文海宝韻』による西夏言語学に対する貢献の一つは、声調と韻類を明確にしたこと、そしてもう一つは、一字一字に反切注音を付けたことである。一つの字に反切上下字があれば、その声母と韻母と調類、即ちその字の語音の各要素がわかることに等しい。近年『文海宝韻』が世に出ると、この反切は、西夏文字研究者たちによってとくに重視され、それをういたそれぞれの字の語音の研究と、係連法を用いた西夏語の声母と韻母の再構成がなされた。しかし反切上下字を使うとき、当然別の言語が仲介するので、西夏文字に漢字の注音を使うときでも、とたんに語音の点で屈折という欠陥にはまってしまうのである。

一方、西夏語の発音の再構成の方でも、国際音標記号で西夏文字の音価を書き表すことは、西夏研究者やシナ-チベット語族研究者たちがとつくに行ってきたことである。もし西夏文字の研究において、科学的な注音体系の再構築ができれば、西夏語音自体の研究を

深めるだけでなく、西夏語の語彙・語法の研究も深められ、同時に、シナ-チベット語族の歴史に対する比較研究の深化にも大きな貢献をすることになる。なぜならシナ-チベット語族の中には、中古時代の屈指の言語資料が残されているからである。

西夏文字の注音は、ロシアのネフスキー教授や中国の王静如教授のような、第1世代の西夏学者から始まった。20世紀60年代以降、西夏語の文献資料が、各学界で次々に公開されるに従い、西夏語音の再構成の案も、数多く提出された。ソ連のソフロノフ、日本の西田龍雄、中国の黄振華、龔煌城、李範文といった各教授によるものがそれだ。しかしこれら西夏語を再構築した専門家たちの再構音には、お互いに食い違いがあり、西夏文字の発音を参照すると、選択に苦しむことが多い。中には、多年にわたり西夏語の発音を研究し、80年代中期には西夏語音体系を再構築し、一字毎に注音した専門書を出版し⁽⁴⁵⁾、さらにその後、その再構した西夏語音を基に宋代の西北方音を研究し、またも専門書を出版したが⁽⁴⁶⁾、それから2～3年も経たないうちに、西夏語の105個の韻の韻価に「自信がない」と言って、自分の再構音を放棄して、別の研究者の再構音に改めてしまった学者もいるのである⁽⁴⁷⁾。この専門家は、過去の著述を自分で否定しまったことになるが、こうした果敢に誤りを修正する精神は、やはり称賛に値する。

これまでの西夏文字の再構音に取り組む研究者は、西夏語研究に多大な辛苦を傾け、西夏語音の研究を推進してきた。しかし一つの言語の音の再構は、一朝一夕で完成するものではない。西夏語について言えば、すでに整理し初歩的な研究を終えた言語資料への、理解と認識を深める必要がある。『文海宝韻』『音同』『番漢合時掌中珠』のような重要な著作を研究すると、西夏語の発音にはまだまだ未解決の多くの問題があり、現状では解決が容易でない難題が続々と待ち受けている。系統的な整理や研究が行われていない西夏言語学には、西夏語の発音研究に対して新資料や新情報を提供するような、研究者の斬新な探索が必要なのだ。例えば、本書では『文海宝韻』を研究して入声を発見したが、これはこれまでの再構音の研究者がみな気付かなかったことである。また『五音切音』という重要な言語学の著作と『文海宝韻』には密接な関係があり、『文海宝韻』の序言に現れる語句が『五音切音』に類似していて、その内容も『五音切音』の記述に符合することを明らかにした。『五音切音』の序にも、特に「『文海宝韻』の字を撰する」とある。西田龍雄教授もこの『五音切音』を紹介ならびに研究し、大きな貢献をされている⁽⁴⁸⁾。この本には6種類の版本がある。その中の一つの版本（No.623）には多くの重要な価値を持つ短冊が貼られ、これについてはまだ整理も研究も進んでいない。『文海宝韻』『音同』『五音切音』は、それぞれに特徴を持ち、長所を持った西夏語の辞書である。西夏語の発音を研究し、語音を再構するには『文海宝韻』『音同』『五音切音』を関連付けた総合的な研究が必須となる。実際に、西夏人は早くもこうした作業を行っている。俄藏黒水城文献には数種類の韻書の残片があるが、その大字の順番は『音同』に倣って配列され、字の注釈もみな『文海宝韻』に倣っていて、その意図は明らかである。つまり両書を結び付け、両書の“いいとこどり”をするためである。こうした残片には書名がないので、私たちが『俄藏黒水城文献』に収録したときは、暫定的に『音同文海宝韻合編』と名付けておいた。この『音同文海宝韻合編』などの文献も研究者の開墾が待たれている。上記の3冊の辞書が載せる内容には、異同があり、矛盾する箇所も見られるが、こうした点はそれぞれの特徴を反映し、あるいは西夏語の時間差や地域差の特徴を反映することが多い。これらの差異を利用すれ

ば、より多くの収穫が期待できる。私は、こうした重要な資料を利用し、解決可能な問題はできるだけ多く解決して、再構した西夏語の発音は正しいか、科学的か、を判明できる日が、一日も早く来ることを期待している。

西夏語音の再構は、他の科学的な事業と同じように、勇気が要るだけでなく、科学的な研究精神と真摯な研究態度が求められる。近年、龔煌城教授は、西夏語研究の方面に尽力され、優れた業績を収めている。教授は、西夏語の音韻転換の研究で人々を啓発し、西夏語の音韻と構詞法についての認識を深めた⁽⁴⁹⁾。聶鴻音教授は、西夏語音韻の内部区別を研究し、西夏語音韻内の小韻区分の問題の解釈を試みて、創意あふれる見解を出された⁽⁵⁰⁾。西夏の言語と文字の研究という煩雑で困難な仕事に、誤りは避けられない。しかし誤りが全篇に満ちていては、参考価値があるとは言いがたい。ある西夏語研究者は『音同』を研究し、専門書の出版も行ったが、その中の西夏文字の注音には、本文最初の頁（原文では2頁目）にすでに2字の韻類を誤っている。2頁5行目6字目 **𐽀** を上声第54韻とするが、正しくは上声第86韻で、6行目8字目 **𐽁** を上声第48韻とするが（大字は19頁右面6行目8字目も同様である）、正しくは平声第71韻である。こうした誤りは、最近刊行された『夏漢字典』にも引き継がれ、訂正がないのは、はなはだ残念である⁽⁵¹⁾。

西夏語の発音の再構には、まだまだ長い年月が必要であることを考え、本書で『文海宝韻』の大字の字音を付けるときにも、漢字の注音方式を採用した。これらの注音に使われた漢字は、西夏人自身がその当時に付けたものである。直接注音していない字には、その字の西夏文字による反切上下字で注音してある。こうした方法は、現在の西夏語の再構音が諸説定まらない状況では、より科学的で、より正確で、より穏当なのである。

最後にまとめとして、写本『文海宝韻』の研究と、刊本との比較を通して、私たちはこの書の編纂者とおおよその編纂時期を検討したほか、平声部では照合と補充を行い、『文海宝韻』の上声部で全体像を把握し、『文海宝韻』の入声部を初めて発見したことで『文海宝韻』の全貌を了解し、これにより『文海宝韻』の雑類部分の体系を知ることができた。これでもまだ、写本『文海宝韻』が西夏語研究にとって莫大な科学的価値を持つことを理解できない者がいるであろうか。

脚 注

- (1) 史金波、白濱、黄振華：『文海研究』，中国社会科学出版社，1983年3月。
- (2) N.A.ネフスキー：『(西夏語文学)』，モスクワ，1．2，1960年。
- (3) Z.I.ゴルバチェワ、E.I.クチャーノフ：『(西夏文手写本及び木刻本)』，モスクワ，1963年。
- (4) この文献については稿を改めて紹介したい。
- (5) 史金波、魏同賢、クチャーノフ主編：『俄藏黒水城文獻』第七冊,177-232頁。
上海古籍出版社，1997年3月。
- (6) 史金波、黄振華、聶鴻音：『類林研究』，寧夏人民出版社，1993年9月。
- (7) 『国立北平図書館館刊』四卷三号（西夏文專号），1933年，北京。
- (8) N.A.ネフスキー：『(西夏語文学)』，1.100，1960年。
- (9) Z.I.ゴルバチェワ、E.I.クチャーノフ：『(西夏文手写本及び和木刻本)』，45-46頁，1963年。
- (10) K.B.ケピン、B.C.クロクロフ、E.I.クチャーノフ、A.P.テレンチェワ-カタンスキー：『(文海)』，モスクワ，177-232頁，1969年。
- (11) 西田龍雄：近作の中でも、『文海』と『文海雜類』を併称している。
『西夏文研究新考』西田先生古稀記念会編，24頁，1998年11月。
- (12) 史金波：「簡論西夏文辞書」，『辞書研究』，1980年第2期。
- (13) 『文海研究』，序言。
- (14) 史金波：「西夏文文献新探」，史金波、白濱、吳峰雲：『西夏文物』，文物出版社，1988年3月所収。
- (15) 『俄藏黒水城文獻』第七冊,259頁。
- (16) これまでの専門家は残片のオリジナルを直接見たことがないので，写本『文海宝韻』の本文と比較することではなく，ただその内容には“切韻”という言葉があるという間接的な紹介をもとに『五音切韻』の序と見なしていたが，妥当とはいえない。
- (17) 西田龍雄：「西夏語韻図『五音切韻』の研究」(上)，京都大学文学部研究紀要，1981年3月，99-101頁。
- (18) 史金波：「也談西夏文字」，『歴史教学』，1980年10期。
史金波：『西夏文化』，吉林教育出版社，1986年12月。「西夏文字の創作と制定に関する諸説」(11-15頁)
- (19) 宋・沈括『夢溪筆談』の記載に依ると「元昊が謀叛を起こし，その配下の野利遇乞が蕃字を創るに，ひとり家に籠もり，年を重ねて作り上げ，これを献上した」とあり，内容が一致しない。
- (20) 史金波：『西夏佛教史略』，寧夏人民出版社，1988年8月。66-68頁。
- (21) 史書には，宋の宝元元年（1038年）「冬10月，元昊帝を称し，建国して大夏と号し，天授礼法延祚と改元す。元昊元卒を称して已に数年す。元卒とは，華言の青天子，中国の黄天子たるを謂うなり。是に至り，野利仁栄、楊守素らと謀りて帝号と称し，是の月の11日台を興慶府に築き，冊を受け皇帝の位に就く」とある。『宋史』卷485「夏国伝」，吳広成『西夏書事』卷12参照。

- (22)『文海研究』19・262 (漢文訳 421頁, 影印 574頁)。
- (23)西田龍雄教授はこの貴重な残片を抄録し,「西夏語韻図『五音切韻』の研究」(上) 京都大学文学部研究紀要, 1981年3月に発表。訳文には筆者の加筆がある。
- (24)西田龍雄:「西夏語韻図『五音切韻』の研究」(上)(中)(下), 京都大学文学部研究紀要, 1981年3月-1983年3月。
- (25)この序言は西田龍雄教授が以前全文を翻訳した。「西夏語韻図『五音切韻』の研究」(上),122-123 頁。その後李範文氏が『同音研究』(23-26頁)に収録したが, 翻訳の誤りが多い。例えば“接”を“句”と誤訳し,“撰接韻母, 為文庫本”を“撮略搜集韻母, 本為造句賦文”と句読を誤り, さらには“護法”(道教)を“成法”と誤訳しまた“道士、医師”を“成法治人”などと誤訳している。
- (26)『文海宝韻』の抄録者は, ここで余計なことをしている。第21韻と第22韻の初めが欠け, 韻類の番号もつながらないので, 抄録者は第20韻の中の2字を勝手に第21韻と第22韻の代表字とし, 韻類の番号を書き込んでいる。そのため, この文献を利用するときには, 特に注意が必要になる。
- (27)『文海研究』, 560, 398ページ。
- (28)『文海研究』, 560, 399ページ。
- (29)『文海研究』, 626, 502ページ。
- (30)『文海研究』, 635, 514ページ。
- (31)『文海研究』, 561, 400ページ。
- (32)『文海研究』, 572, 418ページ。
- (33)『文海研究』, 628, 505ページ。
- (34)『文海研究』, 634, 514ページ。
- (35)『同音研究』, 344頁。
- (36)『夏漢字典』, 497頁。
- (37)『同音研究』, 384頁。
- (38)(西夏) 骨勒茂才著、黄振華、聶鴻音、史金波整理:『番漢合時掌中珠』, 寧夏人民出版社, 1989年12月, 51頁。
- (39)『俄藏黑水城文獻』第七冊, 259頁。
- (40)『俄藏黑水城文獻』第七冊, 内容提要, 1頁。
- (41)西田龍雄:「西夏文字新考」, 東方学会創立五十周年記念『東方学論集』, 1997年5月に初出, 西田龍雄『西夏語研究新論』所収, 99頁(014)。
- (42)李範文:『同音研究』, 寧夏人民出版社, 1986年9月, 335頁, 337頁, 389頁。
李範文:『夏漢字典』, 中国社会科学出版社, 1997年7月, 504頁, 896頁, 272頁。
- (43)西田龍雄教授はサンクト・ペテルスブルクで雑類の残片の何枚かを見て, 並べ替え, つなぎ合わせて, 合計 190字を記録した。西田龍雄:「西夏語韻図『五音切韻』の研究」(上), 京都大学文学部研究紀要, 1981年3月, 99-101頁。本稿で得た42枚の残片には西田龍雄教授が未収の27枚を含む。また西田龍雄教授が当時ご覧になった残片の数枚は現在見つからず, それは上声部の正齒音・喉音・来日舌齒音に属する合計52字。もし上述のこうした残片を加えれば, 写本『文海宝韻』の雑類には合計 368字が収められていることになる。

- (44) 史金波、黃振華：「西夏文字典『音同』的版本與校勘」，『民族古籍』1986年1期。
史金波、黃振華：「西夏文字典『音同』序跋考索」，『西夏文史論叢』(一)，寧夏人民出版社，1992年。
- (45) 李範文：『同音研究』，寧夏人民出版社，1986年9月。
- (46) 李範文：『宋代西北方音』，中國社會科學出版社，1994年6月，59頁。
- (47) 李範文、中嶋幹起編著：『電腦處理 西夏文雜字研究』，(日本)國立アジア・アフリカ言語文化研究所，1997年3月。
- (48) 西田龍雄：「西夏語韻圖『五音切韻』の研究」(上、中、下)，(日本)京都大學文學部研究紀要，1981-1983年。
- (49) 龔煌城：「西夏語的音韻轉換與構詞法」，『歷史語言研究所集刊』第64本第四分冊，1993年12月。
- (50) 聶鴻音：「『文海』韻的內部區別」，『民族語文』，1998年1期。
- (51) 李範文：『同音研究』，205頁，206頁，291頁。『夏漢字典』，510頁，108頁。